年　報

# HUCC

法政大学・多摩地域交流センター

Hosei University Center for University-Community Collaboration, Tama Campus

# 2015

## 2015 年度　多摩地域交流センター年次報告書
刊行によせて

法政大学が多摩にキャンパスを構えて 30 年が経ちましたが、学生と地域の方々との間の接点は、サークルやゼミ、部活単位での活動に、2013 年秋に開室された当センターの学生プロジェクトも新たに加わって、さらなる広がりを見せております。そこには、学生が地域にお邪魔させて頂き、交流を楽しむ次元に留まらず、地域の課題解決に向けても、未熟ながらも若い感性を活かしてチャレンジしようとする姿も具体的に見え始めてきました。
その中で、当センターの運営に関わる先生方から、学生と地域の皆さんとの間に理想的な関係が見出せる学生プロジェクトを表彰してはどうか、という声が上がりました。そこで、多摩地域交流センターでは、「法政大学地域交流賞」を今年度より創設することと致しました。

「貴プロジェクトは、法政大学多摩地域交流センターの 2015 年度助成金プロジェクト・登録団体として○○において活動に励み、地域コミュニティの活性化に貢献しました
これは貴プロジェクトが地域の課題に対して、地域の方々と交流・連携しながら、学生ならではの発想や行動力で、その解決に向けて尽力した成果であります
今後の一層の活躍を期待し、ここに表彰します」

これが今年度の表彰状の文言です。この文言を紡ぎ出すまでに、スタッフや先生方と多くの議論を交えました。その過程で改めて確認できたことは、「地域の課題に対して、地域の方々と交流・連携しながら、自らの発想や行動力で、その解決に向けて尽力する学生たちを（また教員の皆さんを）サポートしていく」当センターの使命でありました。
この文言が指し示す「地域」は、現時点では多摩キャンパスの近隣地域を想定しておりますが、学生プロジェクトの中には、東北の被災地支援を志すものも既に出てきており、ゆくゆくは多摩周辺からさらに広がりを持って各地の現場と繋いでいく活動も出てくるでしょう。そのような将来の期待を込めて、この賞の名称には「多摩」という地名をあえて外してあります。

「多摩地域交流センターが何をやっているところなのか分かりにくい」という声もまだまだ聞かれます。ですが、当センターは自ら色を作り出すことができません。学生や教員の皆さんと、地域の皆さんとの間で交わされる多彩な活動であってはじめて当センターの出番があり、そこから少しずつ色付けをしてもらえていると感じています。
意欲ある学生たちの展開が進めば、今度は、地域の大人たちの側が、学生たちと単に楽しい場を過ごすだけでなく、彼らに刺激を受け、地域づくりに向けてどれほど本気なのかが試される場面も生まれてくるでしょう。地域の前進のためには、よそ者と楽しみを共有する「初期交流」から、お互いに学び高め合う「発展交流」へ、という関係づくりの展開が大事だ、とされています。そのためにも、大学に集う多彩な教員の専門性を地域に繋いでいく接点づくりも、今後必要になるはずです。
当センターの特色が定まるまでには、もう少し時間を要するかもしれません。引き続き、温かい目で見守って頂きつつ、またご指導も頂きますよう心よりお願い申し上げます。

2016 年 3 月　多摩地域交流センター長　図司 直也

もくじ


年間カレンダー ・・・ 4
地域交流ＤＡＹ ・・・ 8
学生プロジェクト
ＨＵＣＣ助成金プロジェクト ・・・ 14
多摩地域交流センター　多摩地域形成論 ・・・ 42
@ 団地　法政大学×地域活性化プロジェクト ・・・ 72
たままち日和 ・・・ 78
地域まるごとミュージアム構想プロジェクト ・・・ 84

# HUCC Calendar

2015/2016

| | Apr 4月 | May 5月 | June 6月 | July 7月 | Aug 8月 | Sept 9月 |
|---|---|---|---|---|---|---|
| | 第1回多摩地域交流・連携委員会開催 4/24 | 第2回多摩地域交流・連携委員会開催 5/22 | 第3回多摩地域交流・連携委員会開催 6/26 | 第4回多摩地域交流・連携委員会開催 7/24 | | 第5回多摩地域交流・連携委員会開催 9/22 |
| センター行事 | 学生プロジェクト募集開始 4/4〜<br>多摩地域「学生プロジェクト」助成金募集(HUCC助成金)4/1〜5/11<br>多摩地域交流センター企画スタッフ募集 4/10〜 | HUCC助成金 プレゼンテーション審査 5/23 | HUCC助成金　交付 | | | 多摩未来奨学金書類選考 9/25 |
| 学生団体の活動 | 学生プロジェクト"新歓"<br>『合同説明会』4/10<br>新入生向け学生プロジェクト 合同相談会 4/7〜4/24 | たまぼら館ヶ丘プロジェクト<br>『おれんじカフェ』5/31<br>おいでよ！アッとほーむ<br>第4弾 おいでよ！アッとほーむ<br>〜持ち寄り晩ごはん〜 5/15 | | 館ヶ丘プロジェクト 好評第2弾!<br>『たなばたカフェ』7/5<br>第5弾 おいでよ！アッとほーむ<br>〜七夕祭り! みんなで、楽しもう〜 7/12 | | 第6弾 おいでよ！アッとほーむ<br>〜持ち寄り晩ごはん〜 9/24 |
| 多摩地域形成論 | | | | | | 多摩地域形成論<br>(多摩四学部公開科目)<br>第1回 9/22 導入<br>第2回 9/29 多摩キャンパス版「法政学」 |
| コンソーシアム関係 | いちょう塾<br>いちょう塾「多摩と八王子の江戸時代」(八王子学園都市大学)4/14・5/12・5/28 | いちょう塾「「武相学」での学びと地域まるごとミュージアム構想武相学のすすめ」①〜5/16 | いちょう塾「セルフケア実践法」(八王子学園都市大学)6/6・6/13・6/20 | 市民大学<br>市民大学「現代の遺跡保存論」<br>-遺跡保護の歴史と現代の遺跡の保存・活用を考える- 7/18・7/25・8/1・8/8・8/22・8/29 | | |
| その他 | | 第6回 さがみ風っ子トレイルランニング 5/31 | | | | |

# HUCC Calendar

2015/2016

| | Oct 10月 | Nov 11月 | Dec 12月 | Jan 1月 | Feb 2月 | Mar 3月 |
|---|---|---|---|---|---|---|
| | 第6回多摩地域交流・連携委員会開催 10/30 | | 第7回多摩地域交流・連携委員会開催　12/4 | 第8回多摩地域交流・連携委員会開催 1/18 | | 第9回多摩地域交流・連携委員会開催 3/30 |
| センター行事 | 多摩未来奨学金面接・発表 10/2 | 【たままち日和】～学生×地域 つながる未来～ 11/12 | | | 第3回「地域交流DAY」開催 2/2 | |
| 学生団体の活動 | 館ヶ丘プロジェクト<br>『ハロウィンパーティー』10/24 | 館ヶ丘プロジェクト<br>『Sundayふらっと　もみじカフェ』11/29<br><br>学生企画バスツアー『絹の道を歩く<br>～武相地域の文化遺産を巡る旅～』11/22 | | | | |
| 多摩地域形成論 | 第3回～第4回 10/6・10/13<br>多摩キャンパスと近隣地域<br><br>第5回～第6回 10/20・10/27<br>多摩地域の現代史 | 第7回～第9回 11/10・11/17・11/24<br>多摩地域の現在 | 第10回 12/1　＜休講＞<br>第11回 12/8　これからの多摩地域の形成<br>第12回 12/15　多摩地域の現代史<br>第13回 12/22　これからの多摩地域の形成 | 第14回 1/12　これからの多摩地域の形成<br>第15回 1/19　まとめと今後に向けて | | |
| コンソーシアム関係 | いちょう塾「多摩と八王子の江戸時代」（八王子学園都市大学）10/6・10/20・11/10<br><br>いちょう塾「武相の近代ー多摩・津久井の交流史ー」（八王子学園都市大学）10/3 | いちょう塾「ライフサイクルにおける金融資産選択」（八王子学園都市大学）11/11<br><br>いちょう塾「武相における剣術の実態ー幕末期諸流派の動向ー」（八王子学園都市大学）11/21 | | | | |
| | | 市民大学「参加する地域づくり ー地域を知り、自ら創るー」 11/25・12/2・12/9 | | | | |
| その他 | | | | | | |

法政大学多摩キャンパス

# 地域交流DAY

2015年度

## 地域と学生、WIN－WINの関係へ

法政大学多摩キャンパス　地域交流DAY2015

**【開催日】2016年2月2日（火）**

**【会場】法政大学　多摩キャンパス　百周年記念館　国際会議場**

多摩地域交流センターは2016年2月2日（火）、『地域交流DAY 2015』を開催し、地域で活動する学生プロジェクト14チームによる2015年度の活動報告（プレゼンテーション）と、学生、教員、地域の方々など関係者の交流会を行いました。各学生プロジェクトからは1年間の総まとめとして、成果に加えて課題や思うようにいかなかった点が率直に報告され、それぞれの発表に対し、地域側パートナーのみなさんからもコメントをいただきました。
全体を通して、活動を、地域と学生の双方にとって有意義で、かつ、地域の課題解決に向けて年々成長・前進するものにしていこう、との意識がはっきりと浮かび上がり、センター開設から3年で、目指すべき”学生の地域活動像”の共通認識ができてきたことが感じられました。
また、今回、センターでは「法政大学地域交流賞」を設け、相模原市城山地域の活性化に取り組む「つながりプロジェクト」を受賞チームに選び、交流会で表彰しました。

**■事前に「ロードマッピング」で振り返り**

「地域交流 DAY」は、センターの開設記念イベントとして開催した 2013 年度の「地域交流 DAYS」を経て、2014 年度に初めて、学生プロジェクトの活動報告会として開催されました。それに続き、2015 年度も学生プロジェクトの活動発表を行いました。

今回は新たな取り組みとして、発表の前に「ロードマッピング」による活動の振り返りを導入し、「過去〜現在〜未来」の時間軸のなかで活動の展開の把握に取り組んでもらいました。センターが学生に示した手順は、①地域特性・課題を書き出し、②地域のプレーヤーとの相関図を描いたうえで、③時間軸上に「過去」と「今年度」それぞれの活動（アウトプット）と結果や気づき（アウトカム）を書き出し、④俯瞰で活動の意義・意味を分析、最後に、⑤将来のビジョンや計画の立案をする、というものでした。これに沿って学生たちは、模造紙や付せんを用いてワークショップ形式で取り組み、改めて活動の価値や意味、地域との関係性や主体性のあり方を見直す機会となりました。

**■「地域からの要請」と「学生のやりたいこと」の両立を**

当日、会場には、地域で学生が連携している住民の方々、自治体、他大学の関係者など 80 人を超える方々が集まってくださいました。今回は 2014 年度と比べてチーム数が 9 から 14 に増え、活動内容も、農業や東北の震災被災地支援などが新たに加わり、多様性を増しました。発表では、地域側に解決したい課題があり、学生の力を借りたいニーズがある一方で、学生としては、地域からの要請に応えつつも「いかに自主的に活動するか」「自分たちのやりたいこととどう両立させるか」と考え、双方 WIN ー WIN の関係へとステップアップを目指す姿勢が随所に現れました。

学生の発表に対する地域側からのコメントとしては、「学生の存在自体が地域に元気をもたらす」「世代の違いで異なる視点や手法が出た」といった評価のほか、「つながりをどうつくっていくか、何度も試行錯誤してほしい」といった助言が出ました。

また、活動地域以外の方々からも、アンケートを通して多くの意見や助言、個別のプロジェクトに向けての連携の呼びかけをいただきました。特に、

「少しずつ地域の人を巻き込んで活動をながく育てていってほしい。そのために、活動を可視化できたらよい」

「最後にどんな姿のものを作っていきたいのか、また、今、その姿のどの位置まで来ているのか、という観点があるとさらによい」

といったコメントは、センターにとっても今後の目標にしたいご指摘でした。

■つながりプロジェクトに「法政大学地域交流賞」

当日、会場には、地域で学生が連携している住民の方々、自治体、他大学の関係者など 80 人を超える方々が集まってくださいました。今回は 2014 年度と比べてチーム数が 9 から 14 に増え、活動内容も、農業や東北の震災被災地支援などが新たに加わり、多様性を増しました。発表では、地域側に解決したい課題があり、学生の力を借りたいニーズがある一方で、学生としては、地域からの要請に応えつつも「いかに自主的に活動するか」「自分たちのやりたいこととどう両立させるか」と考え、双方 WIN ー WIN の関係へとステップアップを目指す姿勢が随所に現れました。

学生の発表に対する地域側からのコメントとしては、「学生の存在自体が地域に元気をもたらす」「世代の違いで異なる視点や手法が出た」といった評価のほか、「つながりをどうつくっていくか、何度も試行錯誤してほしい」といった助言が出ました。

また、活動地域以外の方々からも、アンケートを通して多くの意見や助言、個別のプロジェクトに向けての連携の呼びかけをいただきました。特に、

「少しずつ地域の人を巻き込んで活動をながく育てていってほしい。そのために、活動を可視化できたらよい」

「最後にどんな姿のものを作っていきたいのか、また、今、その姿のどの位置まで来ているのか、という観点があるとさらによい」

といったコメントは、センターにとっても今後の目標にしたいご指摘でした。



## ＜学生プロジェクト（発表順）＞

■子ども・高齢者・被災地支援　にかかわるプロジェクト

こはる：高齢者サロン活動（町田市相原・相模原市城山）

〔発表者〕社会学部 2 年向田佳奈子さん

キラキラ星：「中心子どもの家」（児童養護施設、相模原市）における育ちの支援

〔発表者〕現代福祉学部 3 年安部昴さん、同 2 年溝上太さん、同 1 年香取理恵子さん

Team Tama：繋げよう！東北支援プロジェクト（宮城県石巻市小渕浜）

〔発表者〕現代福祉学部 2 年上野貴朗さん

さんかく：子どもの居場所づくり（多摩市立諏訪小学校）

〔発表者〕現代福祉学部 3 年飯島隆斗さん、加藤悠貴さん

■ゼミに基づくプロジェクト

現代福祉学部 水野ゼミ：八王子駅南口　空き店舗活用プロジェクト

〔発表者〕現代福祉学部 3 年飯島隆斗さん

経済学部 山崎ゼミ：わくわくほうせい！（子ども向け科学体験イベント活動）

〔発表者〕経済学部 3 年大石奈実さん、笠井大郁さん

現代福祉学部 馬場憲一ゼミ：市民とともに武相地域の歴史と文化遺産を学ぼうプロジェクト

〔発表者〕現代福祉学部 3 年神津秀樹さん、長妻燎平さん

■里山地域でのプロジェクト

たまぼら 藤野佐野川プロジェクト（相模原市緑区佐野川）

〔発表者〕社会学部 2 年田口弘修さん、経済学部 1 年神田将志さん

たまぼら 藤野やまなみプロジェクト（相模原市緑区牧野）

〔発表者〕経済学部 2 年齊藤彩乃さん、同 1 年輕部　士郎さん

つながりプロジェクト：つながりづくり・地域の魅力発見（相模原市城山）

〔発表者〕社会学部 4 年助川功樹さん、現代福祉学部 3 年島崎昭光さん

Community Field：農を通じた地域交流プロジェクト（相模原市城山）

〔発表者〕社会学部 2 年三宅涼介さん、舟串大希さん

■団地でのプロジェクト

@団地プロジェクト：法政大学×地域 活性化プロジェクト（八王子市グリーンヒル寺田）

〔発表者〕社会学部 1 年小野美瑞季さん、神澤詩織さん、高山祐輔さん

法政大学カフェ部（八王子市グリーンヒル寺田）

〔発表者〕社会学部 2 年光山未織さん

たまぼら 館ヶ丘プロジェクト（八王子市館ヶ丘団地）

〔発表者〕経済学部 2 年木村高啓さん、同 1 年宮田康一さん

児童養護施設における
育ちの支援について
キラキラ星

# 学生プロジェクト
# HUCC助成金プロジェクト

**2015年度**

## 本年度プロジェクト（10 団体）

**子ども・高齢者・被災地支援　にかかわるプロジェクト**

- こはる：高齢者サロン活動（町田市相原・相模原市城山）
- キラキラ星：「中心子どもの家」（児童養護施設、相模原市）における育ちの支援
- さんかく：子どもの居場所づくり（多摩市立諏訪小学校）

**ゼミに基づくプロジェクト**

- 現代福祉学部 水野ゼミ：八王子駅南口　空き店舗活用プロジェクト
- 経済学部 山崎ゼミ：わくわくほうせい！（子ども向け科学体験イベント活動）
- 現代福祉学部 馬場憲一ゼミ：市民とともに武相地域の歴史と文化遺産を学ぼう

**里山地域でのプロジェクト**

- たまぼら 藤野佐野川プロジェクト（相模原市緑区佐野川）
- たまぼら 藤野やまなみプロジェクト（相模原市緑区牧野）
- つながりプロジェクト：つながりづくり・地域の魅力発見（相模原市城山）
- Community Field：農を通じた地域交流プロジェクト（相模原市城山）

**団地でのプロジェクト**

- @団地プロジェクト：法政大学×地域 活性化プロジェクト（八王子市グリーンヒル寺田）
- 法政大学カフェ部（八王子市グリーンヒル寺田）
- たまぼら 館ヶ丘プロジェクト（八王子市館ヶ丘団地）

2015 年度

「学生プロジェクト」

詳細レポート

学生プロジェクト

# たまぼら　藤野やまなみプロジェクト

代表者：経済学部　現代ビジネス　２年　齊藤 彩乃
指導教員：社会学部　平塚 眞樹
学生：30 人【４年：７人／３年：２人／２年：10 人／１年：12 人】

(1) 活動団体のプロフィール
「たまぼら」は４つの企画から成る総合ボランティアサークルである。「藤野やまなみプロジェクト」はその中のプロジェクトの一つで、「たまぼら」がサークル化される以前の 2008 年から相模原市緑区（旧藤野町）牧野（まぎの）地区で、牧野元気創生会の方々と共に里山の景観保全活動や地域活性活動を行っている。

(2) 活動概要と目的・目標
活動地域である旧藤野町の牧野地区は若者が少ないにも関わらず、住民の方々は元気で活動力のある地域だ。また、旧藤野町全体としても、シュタイナー学園や彫刻の野外展示がある「芸術の道」などがあり、芸術家が多く住む“芸術の町”としても知られている地域でもある。
現在、我々は、地元の牧野元気創生会の方々と共に活動を行っている。牧野元気創成会は牧野地区のほぼ中心にあたる「やまなみ温泉」の周辺で、人々の憩いの場や観光資源を増やすことで地域活性化を図ることを目的として活動をしている団体である。この団体と連携して、私たちは、やまなみ温泉に隣接しているやまなみ公園のあじさいの整備、学生主体のハーブの栽培、ホタル再生の３つを主な事業として、月に１、２回ほど活動を行っている。
あじさいは、牧野元気創生会の方々がやまなみ公園に植えたもので、その整備を元気創成会の方々と共に行っている。元気創成会の方々が草刈機で広範囲の草を刈りとり、学生があじさいの根元の部分に生えている雑草を鎌で刈り取るといった分担で作業している。
ハーブ栽培は 2014 年９月から学生が主体的に企画し始めた活動である。やまなみ公園内の空いている土地をハーブ園にすることで、そこがやまなみ公園の魅力の一つとなり人々の憩いの場となること、また将来的にはハーブを商品化することにより地域全体の魅力を向上させることを目的としている。
ホタル再生事業は、元気創生会と共同で 2015 年度から始めた企画で、地域の観光資源を増やすことを目的としている。現在、川辺の道の整備やホタルの餌となるカワニナが育つ水辺を整え、ホタルが育ちやすい環境をつくっており、最終的には地元の人々の憩いの場づくり（散策路、児童の遊び場など）、ホタル祭りを通しての交流の場づくりを目標にして活動している。
　これらの活動を通して私たちは、①里山の景観保全や遊休農地の活用をすること、②牧野地域の魅力を発見し発信すること、③活動を通して私たち学生自身が成長すること、を目指している。

(3) 活動記録
牧野元気創生会の方々や、やまなみ公園の周辺地域に住む方々と連携して活動している。特に牧野元気創生会の中では事務局長の落合さんに学生との連絡役としてお世話になっている。また、ハーブの栽培においては、地域の方のハーブに詳しい方がいて、ご指導いただいている。

4 月 11 日　学生参加者 4 人、ハーブ園とあじさい公園の整備
4 月 25 日　学生参加者 26 人、ハーブの植え付け、あじさい公園の整備
5 月 16 日　学生参加者 17 人、ハーブ園とあじさい公園の整備
6 月 20 日　学生参加者 6 人、ハーブ園とあじさい公園の整備、ホタル再生に向けた川などの視察。また、「あじさい祭り」を開催、広島焼きを作り地域の方々と交流。地域の方、約 20 名参加
7 月 18 日　学生参加者 11 人、ハーブ園とあじさい公園の整備
8 月 12 日　学生参加者 7 人、ハーブ園の整備、ハーブ園のデザインのための測量
8 月 24 日　学生参加者 6 人、ハーブ園の整備、ハーブの植え付け
9 月 5 日　学生参加者 3 人、創生会の方 3 人と現地ミーティング
9 月 19 日　学生参加者 11 人、ハーブ園とあじさい公園の整備、ホタル再生事業を行う川の下見、現状把握
10 月 3 日　学生参加者 4 人、ハーブ園拡大のための土づくり、周りの柵づくり
10 月 10 日　学生参加者 10 人、ハーブ園のデザイン案をもとに畑づくり
10 月 24 日　学生参加者 5 人、ホタル再生地の川までの道の整備と水源地の確認
10 月 31 日　学生参加者 15 人、地域のイベント「やまなみたんぽぽフェスタ」に参加。模擬店（フライドポテト、チョコバナナ）を出したほか、パフォーマンス団体として「わくわくほうせい！」の招待・手配にあたり、イベント運営に協力した。
11 月 21 日　学生参加者 12 人、ハーブ園とあじさい公園の整備、ハーブ園の柵づくり。さらに地域の方々との交流のため BBQ を実施。地域の方、約 26 名参加
11 月 26 日　学生参加者 5 人、さがまちカレッジ相模原市藤野エリア魅力発見コンテスト参加
11 月 28 日　学生参加者 5 人、ホタル再生地の川までの道の整備
12 月 19 日　学生参加者 6 人、ハーブ園の柵づくり、ブロック並べ、雑草とり
2 月 2 日　学生参加者約 10 人、地域交流 DAY 参加
2 月 24 日　学生参加者 13 人、地域の方 5 人　現地ミーティング（今後の活動について）

(5) 活動の成果・結果
2015 年度の活動では、学生企画として前年に始めたやまなみ公園でのハーブの栽培を本格化させた。このことにより、以前は牧野元気創生会や地域の方々からの委託によっての活動が主であったが、学生が主体的に企画して進められる活動分野ができ、学生独自の発想を生かし実現できるようになった。
ハーブは、現在植えてあるのは、レモンバーム、タイム、ヤロウ、ラベン

ダー、カモミール、ローズマリーの６種類である。これらを植えるにあたり、ハーブが育ちやすい良い土にするために、地域の方の力を借りて耕運機で畑を耕していただいた。また、畑にはラブレターの形にブロックを並べた。これは、藤野のシンボルであるオブジェ「緑のラブレター」をモチーフとして学生がデザインしたものである。さらに、イノシシなど野生の動物からの被害を防ぐために畑の周りの柵づくりも地域の方に教えていただきながら行っている。このように、牧野元気創生会の方々や近隣に住む方々と協力しながら行うことが出来たと思う。
また、ホタル再生活動については、元気創生会と共同で今年度後半から着手した。まず、ホタルが育つ川までの道の整備を行った。元気創生会の方々に草刈り機で雑草を刈りとっていただき学生も雑草取りを行っている。さらに丸太を運び道の整備も行っている。地盤の緩い急な斜面で行っているため、重労働で危険も伴う作業だが協力して進めている。
さらに、今年度は牧野元気創生会の方々をはじめ、その関係者の方々と一緒にやまなみ公園でバーベキューを行うなど、活動以外でも地域の方々と交流する機会を設けることが出来たことが良かったと思う。

(6) 課題と今後の展望
ハーブ園の今後の課題は、ハーブの栽培だ。今年度に植え付けを行ったうち、半分ほどが枯れてしまった為、安定した栽培を行うことがあげられる。春植えの時期にまた新しいハーブを植える予定なのでそれに向け、ハーブに精通した地域の方にさらにご指導していただいたり、自分たちで勉強をしたりして改善していきたいと考えている。また、来年度は、景観の面にも力を入れ、現在制作途中のハーブ園の周りの柵を完成させたい。さらに将来的には収穫したハーブを商品化したいと考えている。そこに向けてハーブを使った加工品の試作を行いたいと考えている。今後もやまなみ公園周辺地域の活性化を目標として活動していきたい。
ホタル再生事業に関しては、今年度に引き続き、川までの道の整備、ホタルの餌となるカワニナが育つ水辺環境の整備を来年度の活動計画目標としている。
これらの活動全体に関連して、情報の発信不足も今後の課題として挙げられる。牧野地域の魅力や学生が行っている活動を外部の方に知ってもらえるようさらに積極的に情報を発信していきたいと思う。

(7) 実績（受賞、マスメディア掲載など）
相模原市の市民ファンド「ゆめの芽」助成金を受けた。
さがまちカレッジ「相模原市藤野エリア魅力発見コンテスト」に 2 年生メンバー 5 人が参加し、JTB 賞を受賞。

学生プロジェクト・HUCC助成金プロジェクト

# 市民とともに武相地域の歴史と文化遺産を学ぼうプロジェクト

代表者：現代福祉学部　福祉コミュニティ学科　4年　神津 秀樹
指導教員：現代福祉学部　馬場 憲一
学生：8人【3年：5人／2年：3人】

(1) 活動団体のプロフィール
法政大学現代福祉学部　福祉コミュニティ学科　馬場憲一ゼミナール

(2) 活動地域の特性、活動概要と目的・目標
活動地域は武相地域、中でもとくに、法政大学多摩キャンパス周辺の神奈川県相模原市や東京都八王子市などの地域である。特性として、山の多い土地であり、江戸時代から絹織物と養蚕が地域産業として有名であり、それらを扱う生糸商人が栄えたことを示す文化遺産が存在する。また、昭和の第二次世界大戦の痕跡を今日まで遺している戦争遺跡が存在している。
本プロジェクトは八王子市鑓水にある生糸に関係する文化遺産を見学するツアー「絹の道を行く」と、戦争遺跡の保存と戦争の記憶の継承をテーマとしたワークショップと講義を行うシンポジウム「武相地域と戦争遺跡」という二つの企画を行った。対象者は法政大学の学生と、武相地域に住む市民である。企画を通じて、多摩キャンパスに通う学生や地域住民を大学周辺のフィールドに誘い、地域に現存する歴史・文化遺産について学び、理解を深め魅力を発見すること、そして地域住民と学生の交流を図ることが目的である。

(3) 地域での連携
ツアー「絹の道を行く」については、「八王子市郷土資料館」でボランティアガイドをしている大高利一郎氏と福士尭夫氏を学芸員の方からご紹介いただき、お二人にはツアー内での講義を行っていただいた。その他にも講義の場所として使わせていただいた「絹の道資料館」、バスのための駐車場を提供していただいた「八王子市郷土資料館」と八王子市鑓水にある寺院「永泉寺」とも連携があった。
シンポジウム「武相地域と戦争遺跡」では、「浅川地下壕の保存をすすめる会」の中田均氏に戦争遺跡である浅川地下壕についての講義を行っていただいた。

(4) 活動記録
・5月29日、「絹の道を行く」「武相地域と戦争遺跡」「高尾山ツアー」の三つの企画を行うことを目的として活動を開始。
・6月7日、八王子市郷土資料館へ行き文献調査、学芸員の方に本プロジェクトの紹介。ボランティアガイドの方を紹介していただいた。
・6月21日、東京都八王子市鑓水で現地調査。「絹の道資料館」で講義をしていたボランティアガイドの方に、講義後武相地域の地域産業についてインタビューを行った。
・7月3日、「浅川地下壕の保存をすすめる会」とアポイント。
・7月5日、東京都八王子市鑓水で現地調査。
・7月5日、神奈川県相模原市並びに東京都八王子市高尾で現地調査。
・7月10日、「絹の道を行く」のツアールートをゼミで発表、評価。「武相地域と戦争遺跡」をツアー企画からシンポジウム企画へと変更した。
・7月10日、高尾山見学。
・7月17日、津久井在住の有識者たちへ取材。
・8月7日、永泉寺へアポイント、ツアー企画への協力を依頼。
・8月23日、八王子市郷土資料館へアポイント、ツアー企画への協力を依頼。
・9月18日、企画の内容と日程が決定。広報活動としてチラシを作成する。
・9月26日、「浅川地下壕の保存をすすめる会」へアポイント、シンポジウム企画への協力を依頼。
・10月16日、「絹の道を行く」「武相地域と戦争遺跡」「高尾山ツアー」の企画書を作成。
・10月25日、八王子市郷土資料館でボランティアガイド、学芸員の方々とツアー企画について打ち合わせ。
・10月30日、チラシを作成。
・11月6日、チラシを馬場先生が講義を行っている八王子主催の市民公開講座「いちょう塾」で配布、本プロジェクトを紹介していただいた。
・11月13日、「武相地域と戦争遺産」のレジュメを作成する。「高尾山ツアー」の企画は行わないことが決定する。
・11月15日、馬場先生から本プロジェクトに興味があると紹介された市民10名へチラシとお礼の手紙の入った封筒を郵送。
・11月20日、「絹の道を行く」の打ち合わせ、リハーサル。レジュメが完成する。
・11月22日、ツアー「絹の道を行く」開催。参加人数22名。
・11月27日、「武相地域と戦争遺跡」リハーサル。
・11月29日、シンポジウム「武相地域と戦争遺跡」開催。参加人数25名。
・12月4日、反省会をする。
・12月18日、本プロジェクトの報告書を作成。
・2月2日、地域交流Dayにて今年度の活動についてのプレゼンテーションを行う。

(5) 活動成果・効果

●ツアー「絹の道を行く」
6月から下見を始めて見学ルートを決定、8月からアポイントを取り駐車場の確保なども早い段階から決定することができた。八王子市郷土資料館、並びに絹の道資料館、そして学芸員とガイドボランティアの方々と先生の協力もあり、当日は、こちらで事前に調べ解説しようとした内容以上に詳しく話をしていただき、参加者の歴史的・学問的関心を満足させることができた。参加者は学生や地域の中高年の方々など様々だったが、絹の道やそれにまつわるものと関わりを持っているといった発言が参加者からも出て、こうした交流から、個人で絹の道を巡るよりも多くのことを学ぶことができたツアーとなった。
●シンポジウム「武相地域と戦争遺跡」
考え方の異なる人々が集まり話し合うことにより、学生と市民が戦争や平和について考えるきっかけができた。学生と社会人という離れた世代間の交流も行われた。
●両企画の反省点
外部の協力者の方々（学芸員やガイドボランティアの方など）との打ち合わせ不足により、スケジュールの遅れと乱れが出て、参加者に不安を与えた。スケジュールが予定通り実行可能かの見立てが甘く、時間不足により予定していたワークショップ形式の話し合いを十分行うことができなかった。また、ゼミメンバーの役割と仕事に偏りがあり、全体的な企画進行に遅れが生じた。以上のようなことが反省会とロードマップ作成（活動のふり返り）の際に挙がった。

(6) 課題と今後の展望
本プロジェクトの企画は、今年度だけで終わらせてしまっては学生と地域、市民との交流したことによるつながりがなくなってしまう。今後の継続的な企画開催により、学生の地域への関心向上と市民の法政大学への関心向上を目指すことが課題である。本プロジェクトの活動はまだ始まったばかりであり、今後の展望に向けた基礎固めの段階にきている。今年度の反省点を来年度以降の活動で改善し、より学生と地域、市民との交流が盛んとなることができる企画を計画していく。
(6) 実績（受賞、マスメディア掲載など）
・5月2日に町田工業高校にて、教科「奉仕」の中で「地域福祉の重要性」をテーマにボランティアに関する講演会を行う
・11月1日に相模原市社会福祉協議会より、これまでの活動を認めていただき表彰される。
・12月4日の町田のタウンニュースに掲載される。

(7) その他（受賞、マスメディア掲載、学外助成金などの特記事項）
「Peace あさかわ」という「浅川地下壕の保存をすすめる会」ホームページの広報コーナーにシンポジウムが行われたということを掲載していただいた。

学生プロジェクト・HUCC助成金プロジェクト

# こはるサロン活動

代表者：社会学部　社会学科　2年　鈴木 将太
学生：28人【4年：16人／3年：7人／2年：5人】

(1) 活動団体のプロフィール
11年前に法政大学の福屋靖子教授（当時）のゼミによる高齢者の介護予防として活動をスタートする。
現在は町田市相原の丸山地区と相模原市城山の谷ケ原地区の2地域で、それぞれ月に1度談話会を中心としたサロン活動を行っている。その他に、年に2回大きなイベントとして合同サロンと芋煮会があり、あいはら住民福祉協議会や町田、相模原両市の社会福祉協議会などの支援を受け、同時に連携をとりながら実施している。2014年には、相模原市社会福祉協議会から表彰もされている。

(2) 活動地域の特性、活動概要と目的・目標
活動地域の相原と城山は高齢者の割合が非常に高い地域であり、昔から長く住み続けている人が多いという特徴がある。そのため地域性の高い場所ともいえる。サロン活動はもともとは介護予防としての目的が主であったが、最近では、高齢者の引きこもりや孤立化を防ぐための居場所づくりとして、その目的を果たしている。
定例サロンの活動の内容としては、談話会（参加者同士、または参加者と学生の歓談）の他に、歌や体操などがあり、体操は転倒予防を目的とした動きのものである。
合同サロンは、普段あまり接することのない居住地域以外の参加者と交流することで、より広いつながりを築いてほしいという願いがあり、行われている。また、芋煮会の目的としては、学生と地域の住民が、連携して芋煮会を企画・実施することでよりつながりを強くするとともに、合同サロン同様、今まで交流のなかった人たち同士の交流の場づくりとして地域活性化につなげることである。

(3) 地域での連携
毎月サロン活動を行っている相原・丸山地区、城山・谷ケ原地区の他に、合同サロンでは、相原の堺の「わ、和、輪の会」や元橋サロン、緑の会など、普段いっしょに活動を行っていない地域の方たちとも連絡を取り、活動に参加して頂いている。
芋煮会ではあいはら住民福祉協議会の人たちと連携し、本番当日まで月に1度のミーティングを重ねながら、準備を進めている。

(4) 活動記録
【相原サロン】談話会、歌、転倒予防体操は毎回実施。
▽4月25日　学生10名　参加者21名　計31名
※毎年恒例のピクニックを相原中央公園で行った。食事会、公園内散策
▽5月23日　学生4名　参加者19名　計23名
※卒業生の方に来ていただいた。
▽6月27日　学生5名　参加者16名　計21名
▽7月25日　学生3名　参加者13名　計16名
▽8月22日　学生3名　参加者18名　計21名
※卒業生の方が参加し、マッサージ機を寄付してくださった。
▽9月26日　学生4名　参加者11名　計15名
▽10月24日　学生4名　参加者17名　計21名
▽12月19日　学生5名　参加者20名　計25名
▽1月23日　学生4名　参加者18名　計22名
※おしるこを皆で食べる。
▽2月20日　学生3名、参加者11名　計14名
【城山サロン】談話会、歌、転倒予防体操は毎回実施。そのほか、月毎にレクリエーションも実施。
▽4月18日　学生6名　参加者数不明
▽5月9日　学生9名　参加者13名　計22名
▽6月13日　学生5名　参加者10名　計15名
▽7月11日　学生4名　参加者8名　計12名
▽8月8日　学生3名　参加者9名　計12名
※レクリエーションとしてスイカ割りを実施。
▽9月　学生が参加できず、地域の参加者の方々だけで開催。
▽10月　学生が参加できず、地域の参加者の方々だけで開催。
▽12月12日　学生3名　参加者11名　計14名
※レクリエーションとしてクリスマスリース作りを実施。
※冬季の1月、2月は休止。
【大型イベント】
▽11月21日　合同サロン
現役学生と卒業生で23名、地域の参加者33名。計56名が参加。
例年、法政大学多摩キャンパスに地域のサロン参加者を招いて実施している。定例サロンで普段行っている歌と転倒予防体操の他に、レクリエーションとして「言葉づくりゲーム」を行い盛り上がった。また紅葉鑑賞のために

構内散策もした。地域の高齢者の方々に、普段あまり来ることのない大学を知ってもらうことができた。
▽3月2日　芋煮会
学生11名、あいはら住民福祉協議会22名、地域の参加者87名で、計120名が参加。
全体で芋煮を食べた後、レクリエーションを行った。内容としては「江戸前かっぽれ」の演舞鑑賞、全員でアコーディオンの演奏に合わせての歌、「ひとたち折り紙」という工作を行った。他には転倒予防体操も行い、タイムスケジュール的にはかなり忙しいものだったが、非常に盛り上がった催しものとなった。
【その他】
2月2日　地域交流DAY
学生2名が、1年間の活動報告としてプレゼンテーションを行い、相原サロンの地域側の代表者の方にパートナーコメントをいただいた。
(5) 課題と今後の展望
課題は、城山湖周辺地域にプロジェクト以外の学生を呼び込むことが出来たが、まだまだ人数としては少ないという点である。また城北と小松という2つの自治会で活動するにあたり、城北地区での活動に偏ってしまい、小松地区の方々が参加しにくかったという面が反省点である。
今後の展望としては、「一過性に終わるイベントだけでなく、長期的で魅力的なイベント」を提案できるよう創意工夫していきたいと思う。そして城山湖周辺地域が地域住民にとっては「誇りの場」となり、学生にとっても「魅力ある場」となることを目指していきたいと思います。

(6) 実績（受賞、マスメディア掲載など）
こはるのメンバーが不足しているために、相原、城山サロンともに学生の参加者数が少なくなってしまっているので、人不足を解消する必要がある。また地域側の参加者の方々の高齢化が進み、なかなか、外出しづらくなってきているという事実もあり、地域側でも参加者数を減らさないことが課題となっている。
サロンの運営面においては、学生の継続的なサロン参加が困難になっているので、運営のやり方を変えていく必要がある。サロンの内容が毎回固定化するなど、活動自体のマンネリ化が進んでいることから、活動そのものを工夫しつつ、新しいことにも学生がより主体的に挑戦していかなければならない。加えて、参加者との交流を意識した催しものも考えねばならない。
合同サロンや芋煮会では、ある程度の準備期間が保証されているのだから、地域住民としっかり連携をとって、学生が主導権を握る形にしなければ、会そのものの意義が失われてしまう。より積極的な姿勢で挑む必要がある。
サークル内でこはるの活動の意義や情報がうまく共有できていないので、学生同士の交流も増やしていく必要がある。新入生にもこはるのサロン活動の意義をしっかりと伝え、継続的なサロン活動につなげたい。

(7) その他
特になし

ゼミナール・HUCC助成金プロジェクト

# 空き店舗活用プロジェクト

代表者：現代福祉学部　福祉コミュニティ学科　3年　飯島 隆斗
現代福祉学部　水野 雅男
学生：21人【4年：7人／3年：8人／2年：6人】

(1) 活動団体のプロフィール
4年前から水野ゼミとして八王子駅南口周辺の地域・子安町をフィールドに活動している。駅の南口と北口に関する店舗調査、南口に関する政策提言、商店街のイベントでの客層調査を経て本年度の活動に至る。

(2) 活動地域の特性、活動概要と目的・目標
子安町は駅近くの町で、駅から南に向かっていくと急な坂が伸びている。商店街は坂より手前にあり、以南はほぼ住宅街である。駅の北口に比べて南口は圧倒的に個人商店が多く、人通りが少ない。商店街がそのような印象を変えるために開催したイベントでは数多くの来客があったが、リタイア後の男性が見られなかったことから、ゼミでは「家と職場の往復で地域との繋がりを持たない男性がリタイア後に居場所をなくしているのではないか」という仮説を立てた。また、この地域では空き店舗もあり、寂しい印象がある。そこで、空き店舗を活用してリタイア男性が主体的に活動できるカフェを作ろうというのを本活動の目標とした。また、坂が多く生鮮食品を売るスーパーなどが遠い地域でもあるため、フードデザート問題の解決も視野に入れた。
構想の具体的な概要は以下のとおり。
1. ライブラリーカフェ（常設）
6月から店を畳む予定である居酒屋「みづき」の店舗を借りて、リタイア男性が働き、リタイア男性や地域の人が遊びに来られるような場づくりを目指す。店内にはリタイア男性が絵画や写真などの趣味の創作を展示するブースを併設する。
2. パフォーミングカフェ（イベント時）
空き店舗である多摩信用金庫の元八王子南口支店を借りて、リタイア直後の世代が楽しめるような（The Beatlesなどの）音楽演奏やダンスなどのパフォーマンスを開催する。飲み物を出すブースも併設。

(3) 地域での連携
上記の2つの店舗にコンタクトを取った以外に、南口商店街のハロウィーンイベントである「Honey’s Garden」を主催するデザイン事務所「トリッキー」や、中心人物の小俣能範さん、元生協職員でありコミュニティビジネスの経営などを研究する「はちおうじ志民塾」OBの石川敏之さんの賛同を得て随時アドバイスをいただいた。
さらに、コワーキングスペース8Beat、NPO法人AKITENにヒアリング等に協力してもらったほか、フードデザート問題に関連して八王子野菜を作る農業法人FIOともつながりを持ち、野菜をカフェ、イベントで販売できるように協力を得た。また、商店街イベント「Honey’s Garden」の際には、「優ゆ家かフェ」の協力を頂き、店の敷地内で水野ゼミとして催しを開催することができた。

(4) 活動記録
▽5/22　トリッキーにて会議。ゼミ生7人参加、小俣さん、石川さん参加
小俣さん、石川さんに企画の概要を伝える。お二人から、「実態をつかめていない層なので、一人でいいから中心になってくれるようなキーマンが必要」、「広報に関しても、その世代に対して印象に残るような象徴的なデザインが重要」、「支援というよりは頼っているというスタンスのほうが円滑ではないか」などの意見が挙げられ、それを基にコンセプトをより固めていく。

▽6/5　居酒屋「みづき」にてオーナーと話し合い。ゼミ生6人参加、石川さん参加
オーナーの方とのコンセプトについての話し合いの中、オーナーの方から「昼にカラオケを開きたい」、「会員制で一見さんお断り」、「居酒屋の内装をカフェにすると少し暗いかもしれない」といった意見が挙げられた。
どちらが正解ということはないが、私たちは地域に開かれた居心地の良いカフェを目標にしていたので少し意見が噛み合わず、この話し合いの結果、残念ながら「みづき」との協働は諦めることになった。またその後日、たましんへの交渉も「耐震構造に問題がある」とのことで断られてしまう。何か有事の際、私たち学生は責任が取りづらい。空き店舗を借りるのも簡単ではないと再確認した。ここで企画は早くも振り出しに戻ってしまう。とにかく、キーマンと代わりとなる場を探していく方針を決定した。

▽6/12　8beatにてヒアリング。ゼミ生6人参加
少し下がり気味のモチベーションの中、八王子の起業家たちが集うコワーキングスペース8beatを訪れた。意外にも8beatの利用者は年配の方々が多く、私たちが対象としている世代と近いことが分かった。だが、子安町の方々は見受けられなかった。オーナーにゼミの構想を話すと、26日に

市の職員を招いて八王子創生会議があるので参加してはどうかとのことであった。また、8Beat立ち上げ当初の話から、改めて広報のデザインは重要だと再確認した。

▽6/19　AKITENにてヒアリング。ゼミ生5人参加
空き店舗を活用して様々なアートイベントを開催するNPO法人AKITENの活動についてお話を伺った。
ここでもやはりデザインの重要性について再確認できるような内容であった。ホームページや事務所に入った瞬間など、「オシャレだな、分かりやすいな」と感じ、こういったデザインを真似していきたいと思った。しかし、ただひたすら話を聞き続けるという受動的な体制になってしまったため、あまり成果は得られなかったことについては反省しなければならない。

▽6/26　八王子創生会議。ゼミ生1人参加
8Beatにて開催。集まった参加者の前で発表団体数チームがそれぞれ「八王子にあったらいいのに」と思う新しいビジネスや取り組みを提案し、それに対して市職員や参加者がコメントするというもの。
内容は医療機関のボランティア拡充から商店主催のシャトルバス企画まで幅広かったが、あまり私たちの活動と重なる部分は多くなかった。しかしながら、参加している人たちはみな知り合いのようで、終始会話が盛り上がっていた。八王子にもこのような大きなクラスタがあることを初めて知った。

▽7/17　優ゆ家かフェにて話し合い。ゼミ生6人参加、石川さん参加
子安町の優ゆ家かフェにてお茶を飲みながら作戦会議。なかなか活動が進まないことに危機感を抱く。
地道に、雑草根性で頑張っていこうということで決定した。

▽9/25　優ゆ家かフェにて話し合い。ゼミ生5人参加
前週のゼミで再度活動の方針を考えたところ、カフェを作るよりも1カ月後の商店街のハロウィーンイベント「Honey’s Garden」に出店し、再度リタイア男性に商店街に出てきてもらえるよう仕掛け、そこでもう一度調査をすべきではないかという案が出た。そこで、優ゆ家かフェとの共同開催ということにしてカフェの前で催しをさせてもらえないかとオーナーに伝えたところ、快く賛同していただいた。しかし、リタイア男性の興味を引く企画を考えなければならない。それと同時に広報のチラシも見やすいデザインで作成しなければならない。

▽10/2　優ゆ家かフェにて話し合い。ゼミ生6人参加、石川さん参加
イベント企画の最終確認。話し合いの結果、企画の内容は、自分の読み終わった本を持ってきて他の誰かの本と交換できる「交換型古本市」、農業法人FIOの野菜を売る「八王子野菜マルシェ」の2つに決まり、休憩できるように椅子をいくつか設置することにした。また、チラシは分かりやすく地図も載せることにした。その他、古本も元手が必要とのことから、現代福祉学部の事務課の方々からいらない古本を寄贈していただいた。

▽10/23　子安町にてイベントの広報活動。ゼミ生7人参加
夕方から子安町の住宅街地域にチラシをポスティング。何度も思うが、やはり坂が多くて疲れる。

▽10/25　Honey’s Garden参加、優ゆ家かフェでイベント開催。ゼミ生4人参加　石川さん参加
イベント当日。チラシを見て来たという人もちらほらいたが、多くは奥様方だった。また、優ゆ家かフェは地元の子育て世帯、とりわけママさん方が週末に集まる場所としても機能しており、これら2つの事情から、八王子野菜マルシェは好評であったが古本市に関しては利用者が一人もいなかった。やはりリタイア男性は姿を見せなかった。後日の反省会では「企画自体が面白くなかったのではないか」、「買いに来た奥様方に旦那のことを聞けばよかったのでは」などの意見が挙がった。結局リタイア男性がどこにいるのかという疑問はいまだに残ったままである。

▽12/9　八王子医療刑務所跡地活用についての会議。ゼミ生1人参加
子安町にはもともと医療刑務所があるが数年後の移転が決定している。その跡地の活用についての会議が8Beatで行われたので参加したところ、八王子市が作成した活用の素案では、住民が集まれるようなブースを内包した史料館などが予定されていると報告された。具体的な内容については全く明らかではなかったが、完成すれば子安町の住民の暮らしにも良い影響を及ぼすことであろう。

▽2/2　地域交流Dayで2015年度の活動報告。ゼミ生2人参加、小俣さん、石川さんがパートナーコメント
活動報告終了後の懇親会にて、はちおうじ志民塾OBの方から「お父さんお帰りなさいパーティー」、略して「おとぱ」の存在を聞く。リタイア後の男性を対象にしたもので、本来そこに出てこないような人たちを対象としていた私たちにとっては少し違うかもしれないが、興味はある。

(5) 活動の成果・結果
全体的に見て、成功とは残念ながら言えない。強いて言うなら、何回も活動に参加してくださった石川さんの存在を子安町界隈に周知できたことと、私たち自身の視野も広がったことだけだろう。子安町という地域に対しては全く成果を残すことができなかった。このことを深く反省し、来年度の活動につなげなければならない。

(6) 課題と今後の展望
反省すべき点を挙げればきりがないが、最も根本的な問題を3つ挙げる。
まず、前年度までの活動の記録の引継ぎに失敗したことが挙げられる。そのため、今年度の活動が始まったころの私たちは自分たちが何をすべきかを理解しておらず、モチベーションの低さも最後まで引きずってしまった感覚がある。そのため来年の活動からは情報の共有をしっかりと行わなければならない。
また、カフェを作ることを先に決定してしまったことも問題だったと考える。本来であればまず実態がよく掴めていないターゲットに関する調査をして様々なリタイア男性に会い、しっかりとリタイア男性の需要を見極めなければならなかった。しかし、カフェを作ることの決定が先行してしまい、誰が、どういう思いで働くのかを考えないまま、現実感が沸かず、地に足つかぬ活動になってしまった。次のステップへ行くタイミングを間違えたといえるだろう。来年度からはしっかりと確証を持てるようなデータを取ることからはじめることが重要になってくる。
最後に、日々のフィールドワークの中で私たち自身がすすんで地域の方々の会話に入っていかなかったことが挙げられる。どの団体のお話を聞きに行っても「水野ゼミと団体」、「水野先生とその団体のオーナー」の会話でしかなく、ゼミ生自らがきちんと関心を持って話に加わっていくことがなかった。そのため全く情報が集まらず、更に問題意識も高まらないという負の連鎖が生まれてしまった。代表者がしっかりとメンバーをまとめ、モチベーションを上げなかったことも原因と考えられる。当たり前のことではあるが、先生の後について歩くだけではだめなのだ。積極的にメンバーが発言しやすい雰囲気づくりを心掛けなければならない。また、振り返りで「福祉機関や民生委員、自治会などにヒアリングをしていない」との意見も出たので、今後の展望という点では当分はターゲットの実態把握が必要ということになるだろう。来期もこの活動が続くかどうかはまだ分からないが、挙がった意見の中から何かを明らかにできればと思っている。

(7) その他
特になし

ゼミナール・ＨＵＣＣ助成金プロジェクト

# わくわくほうせい！

代表者：経済学部　経済学科　３年　大石 奈実
指導教員：経済学部　山﨑 友紀
学生：16 人【４年：８人／３年：６人／２年：２人】

## (1) 活動団体のプロフィール

法政大学経済学部の山﨑ゼミナール所属の学生で構成されています。
2009 年からスタートし、自然や施設に恵まれている法政大学多摩キャンパスを活かして、多摩地域の子どもたちを招いて自然や科学実験を体験してもらうイベントを実施するほか、自治体や企業とのコラボレーション企画や地域イベント等への出張も行っています。
＊ゼミは 2015 年度は山﨑先生が在外研究で不在のため、青山衛先生が代行。

## (2) 活動地域の特性、活動概要と目的・目標

活動は、法政大学に園児や児童を招き、理科の実験や自然と触れ合うイベントを実施したり、こちらからイベントなどに出向いて出張型の理科実験ショーをしたりすることです。2015 年度は、出張型のイベントが多くなりました。
こうした活動によって、近年自然と触れ合うことが少なくなっている子どもたちに自然と触れ合う機会を提供することで、自然や環境問題等に興味・関心を持ってもらうことや、科学的な実験を通して理科に興味をもってもらうことを目指しています。近年は「理科離れ」が問題視されているので理科好きの子どもを増やす手助けになればと思っていますし、また、理科に限らず〝学ぶ楽しさ〟を知ってもらえればと思っています。
わくわくほうせい！は、特定の地域で活動しているわけではないですが、企業や自治体、保育園など様々な団体と連携して実施しているため、依頼をしてくださる相手が、何を私たちに求めているかを把握し、それに合うような内容や実施方法を心がけています。例えば、多くの子どもたちが来るお祭りなどでは、より多くの子ども達に体験してもらえるように短時間で出来るものを用意したり、保育園の園児に大学に来てもらって行う時のように、子どもの人数がはじめから決まっている際は、道具や材料をきちんと用意して、時間より内容に重点を当てた実験をしたりしています。また、イベントを開催するなかで、地域や自治体の方との打ち合わせや学生間でのミーティング、イベント終了後の反省会などを通してイベントの質を上げる、という一連の流れを経験することで、地域と大学をつなぎ、学生自身も社会に出てから活かせる能力を身に着けることを目標としています。

## (3) 活動記録

福生市で行われている「ふっさ環境フェスティバル」に参加させていただいており、準備段階の会議にも参加し、学生目線の意見を取り入れていただいています。また、多摩市の多摩センターで行われるお祭りにはベネッセコーポレーションからの依頼で参加しています。2015 度は、子ども祭りとハロウィンのお祭りに合計 2 回参加させていただきました。また、小山保育園の子ども達には 2 年連続多摩キャンパスに来ていただいています。
これら自治体、企業、保育園のほか、2015 年度は、大学近隣の個人経営の会社や、他の地域活動サークルとも、連携が広がりました。

## (4) 活動記録

①５月５日　多摩センター子ども祭り（ベネッセコーポレーション、多摩市）：科学の原理を使った工作
②６月７日　ふっさ環境フェスティバル ( 福生市 )：科学工作と実験ショー
③７月 11 日　夕涼みマルシェ（くうちん工房、町田市）：科学工作
④ 10 月 25 日　多摩センターハロウィーン祭り（ベネッセコーポレーション、多摩市）：科学工作
⑤ 10 月 31 日　やまなみフェスタ（相模原市緑区・藤野南小学校）：実験ショー
⑥ 12 月４日　法政大学多摩キャンパスでのイベント実施（小山保育園）：科学工作と自然体験スタンプラリー

## (5) 活動の成果・結果

今年度は、山﨑先生が在外研究でいない中での活動となりましたが、計６回実施することが出来ました。2014 年度とは違う実験を実施したり方法を変えたりして、より子どもに理科を楽しんでもらえるように心がけました。また、今年は例年山﨑先生が行っていた実験ショーも学生で行い、とても評判も良く、活動の幅が広がった１年でした。
ふっさ環境フェスティバル（活動記録の②）や多摩センターのお祭り（①、④）は、2014 年度に引き続き依頼をしていただきました。その他、くうちん工房（③）や藤野の「やまなみフェスタ」（⑤）は、今年初めて依頼をいただくこともできました。特に、「やまなみフェスタ」は、地域交流センターを通してサークル「たまぽら」の藤野やまなみプロジェクトとのコラボレーションを実現することができ、とても良い機会となりました。これを機会に、地域交流センターを通して様々な団体とコラボレーションできればと思います。
小山保育園（⑥）の子どもたちにも 2014 年同様、多摩キャンパスに来てもらうことができました。子ども達から「葉脈のしおり作りが楽しかった！」、「また実験やりたい！」などの手紙もいただき、園長先生からも「また呼んでいただいてうれしいです。」というお言葉をいただけました。

## (6) 課題と今後の展望

課題は、この活動はあくまでもゼミの一環のため、学生それぞれが自身の研究をしながらの活動になってしまうため、活動の回数に限界があるところです。今年度は活動回数を増やし、より多くの人にこの活動を知ってもらうことが出来ました。しかし、それによって新たに依頼をしていただいても、人数も足りておらずこれ以上回数を増やせないのが現状です。
今後の展望としては、地域交流センターを通して他の団体と協力していけたらと思っています。わくわくほうせい！で行っている実験は子ども向けのため簡単なものばかりなので、誰にでもでき、また出張型がメインになっているようにどこでも出来るため、各地の地域活動団体ともコラボレーションして、他団体のメンバーにも実験ショーや科学工作の実施に参加してもらい、人員不足をカバーし、実施回数を増やしたいと思います。また、継続性を高めるためにも、この活動を多くの学生に知ってもらい興味がある人にぜひ山﨑ゼミに来てもらいたいです。

## (7) その他

とくになし

ゼミナール・ＨＵＣＣ助成金プロジェクト

# たまぼら　藤野佐野川プロジェクト

代表者：社会政策　社会学科　２年　田口 修弘
指導教員：社会学部　平塚 真樹
学生：23 人【３年：３人／２年：10 人／１年：10 人】

(1) 活動団体のプロフィール
・毎月１回、相模原市緑区の旧藤野町地域にある佐野川にて、「佐野川地域おこしの会」（代表・藤本孝純さん）に協力をいただきながら、農作業の手伝い、茶畑再生などの活動を行っている。
・ボランティアサークル「たまぼら」の中にあるプロジェクトで、「たまぼら」がサークルとして組織される前に、ボランティアセンターの下で活動が始まり、今年度で７年目になる。
・今年度の所属学生は 25 名である。

(2) 活動地域の特性、活動概要と目的・目標
　佐野川地域は山に囲まれた自然環境が豊かな地域である。茶畑や小麦畑なども見られ、農業も行われている地域である。藤本さんによれば、当地域では若い年代の住人が少なく、人口も減少しているという。高齢化も進行しており、畑の整備がゆきとどきづらくなっている。年に１回、近所の公民館で多様な世代が集まるような催しも行われている。
活動の主な内容の一つは、「佐野川地域おこしの会」の小麦や大豆の畑の農作業の手伝いである。またその関連で、収穫した作物を利用しての味噌づくりやうどんづくりも「地域おこしの会」の方々に教わりながら体験的に行っている。
活動のもう一つの柱は、茶畑の再生である。地主さん協力の下、手入れがなされなくなっていた茶畑をお借りして手入れ・整備を行い、収穫したお茶は工場に委託して製茶してパッケージ化してもらっている。このお茶を他の地域で飲んでもらい、佐野川のPRも行っている。
これらの活動のほか、必要に応じて、地域の道路脇の除草なども行っている
　以上のような活動を通して、３つの目的・目標を達成しようとしている。
①景観保全
茶畑整備や道路の除草などを行うことにより見栄えを良くする。
②佐野川の地域資源の PR
　当地域ではお茶・小麦・大豆などの農産物が栽培されている。これらの農産物を地域資源と位置付け、地域外の方々に向けてその魅力を発信し、佐野川を知ってもらう。具体的には、私たちが収穫した茶を学園祭や他地域のイベントで提供したり、その前段として地域資源をよく知るために、小麦を利用して会の方々に教わりながらうどん作りなどの活動を行う。
③　　地域の方々との交流
佐野川地域は基本的に人口が少ない地域である。地域活性化において何が必要かと考えると、佐野川に、学生を含め、少しでも多くの人を呼び込むことが重要ではないか。こうした願いの下、地域交流を一つの目標としていく。

(3) 地域での連携
私たちの活動は「佐野川地域おこしの会」の協力の下で行われている。特に会代表の藤本さんとは中心的にコミュニケーションを取っており、活動にも毎回来ていただいている。

(4) 活動記録
・５月２日　茶畑整備　参加者 15 名
　今年度入学した１年生向けへの体験という意味合いも込めて年度初めの茶畑整備 ( 草刈り ) を行った。
・５月 23 日　茶摘み　参加者４名
　茶の収穫を行った。今回の収穫では人数の関係で機械を用いて行った。
・５月 24 日　茶の加工体験　参加者４名
　23 日に摘んだ茶の一部を、お茶への理解を深めるための体験として、手もみで製茶した。残りの茶は製茶工場に委託し、100 パックの加工茶を生成した。
・６月 20 日　うどん作り　参加者 20 名
　地域おこしの会が収穫した小麦を使って、佐野川公民館にてうどん作りを行った。講師として「地域おこしの会」の方４名に来ていただき、方法を教わりながら作り、一緒に食べて交流した。
・７月４日　小麦の選別　参加者５名
　「地域おこしの会」の畑で収穫された小麦を、機械を用いて選別する作業を行った。
・７月 12 日　寺田団地のイベントで、佐野川茶の PR 活動　参加者３名
　グリーンヒル寺田団地でのイベントにおいて、５月に製茶したお茶を住人や来客に提供。地域交流センターに登録している他団体（@団地、カフェ部）に協力をもらいながら、佐野川の地図や活動の様子を写した写真も見せて、佐野川とプロジェクトの取り組みについて PR した。
・８月１日　茶畑整備・話し合い　参加者 13 名
　茶畑にて雑草を取り、茶の木の形を整えるなどの整備活動を行った。後半は藤本さんと学生とで、短期的な計画を話し合った。ここで地域住人に私たちの活動の認知をしてもらうため、現地の回覧板に載せるチラシを作成する

ことを決定した。
・9月12日　茶畑整備　参加者12名
　8月に引き続き整備を行った。茶畑周辺や道路に面した場所にある雑草も集中的に除去し、見栄えを良くした。
・10月3日　道路の除草　参加者10名
　行政の整備が滞った地域の道路で、雑草を除去。「地域おこしの会」に所属する田村さんも参加。歩道を中心に協力して作業を行った。地域住人に話を聞かれるなど、軽いコミュニケーションも交わした。
・10月17、18日　多摩祭
　2日間の学園祭でお茶を提供。チラシを用意し、私たちの活動を発信することに努めた。
・11月29日　館ヶ丘団地でのサンデーカフェで佐野川茶のPR
　「たまぼら」の館ヶ丘チームが実施したサンデーカフェで佐野川のお茶を提供。佐野川の活動に参加している学生メンバーも数人参加し、訪れた客に無料提供を行った。
・12月3日　麦踏み・話し合い　参加者7名
　小麦畑で霜対策のため麦踏みを行った。後半は「地域おこしの会」のメンバーの方のお宅で、藤本さんも交えて話し合いを行った。私たちが作成したチラシ(8月の話し合いにて作成が決定)を見てもらったり、体制のあり方などを話し合った。

(5) 活動の成果・結果
①地域おこしの会の農作業の手伝いについて
地域おこしの会の畑で、農作業のノウハウを少しずつ教えていただいた。活動は主として雑草を抜くことであったが、それ一つにしても方法や注意点があり、知識に結びつけることができたし、農業の楽しさも学ぶことができ、活動継続の意欲になった。
②お茶について
お茶の活動は2014年度の夏から始まった。まず、除草を中心とする作業を行うことで、茶畑としての形を整え維持することで、景観保全としての効果が出た。藤本さんによれば、地域の方々も茶畑の景観面での変化を見てくれているとこのことで、「綺麗になったね」とのお言葉もいただいている。
また、今年度は初めてお茶を収穫して、100袋パッケージ化するという初の試みを行った。
お茶の味は、収穫のタイミングが遅くなったことをはじめ、いくつかの要因で良いものと言えないが、収穫したものを形にすることができた。
パッケージ化したお茶については、佐野川のPRに活用しようといくつか取り組みを行った。まず、グリーンヒル寺田で開催された7月のイベントで、他サークル（@団地、カフェ部）に協力を貰いながら冷茶にして住民に配布した。また、創価大学のサークルが主催する「はちおうじ子ども食堂」にもお茶を提供したほか、学園祭ではチラシを見せながらお茶を無料で配布し、館ヶ丘プロジェクトが運営するサンデーカフェでもお茶出しを行った。
このように、複数の場面でお茶を出してきたが、人の目に触れられるような工夫やチラシ作成などの手法を使ったが、大きなＰＲ効果が生まれたという実感はあまりなかった。しかし、お茶を多くの人々に飲んでもらう経験を積むことができ、今後のお茶の活動の自信につながった。さらに、地域交流センターに登録する他団体と連携でき、横のつながりでお互いのイベントに参加することができるのではないかと一つの道を見つけることができた。
今年度の製茶は、初の試み・試験的の意味合いが強かったが、、多くの人に佐野川に来てもらいたいとの地域の方々の願いのために、お茶をどのように使って行けばよいか方向性をさぐることができた。
③交流について
6月に行われたうどん作りでは、地域おこしの会から4名が参加し、作り方を教わりながら学生と多くの交流ができた。藤本さん以外の会の方々も知識や方法を私たちに教えるということになれば、積極的に関与してくださり、私たちの活動を見守ってくださっていることが分かった。道路での除草作業では、作業中に地域の方に一人声をかけてもらった。地域の方々の生活に直接関わるような作業を行うことで、地域の方々に私たちの存在を知ってもらえることがわかった。現地で読まれている回覧板に、「地域おこしの会」のメンバーでもある自治会長の方の協力の下、私たちの活動プロフィールを載せていただいた。こうしたことも、地域の方が私たちを認知してもらうきっかけとなったのではないか。

(6) 課題と今後の展望
▽人との交流の拡大
今年度まで、コミュニケーションの相手は主に代表の藤本さんで、他のメンバーとの関わりは希薄だった。今後、活動の幅や視点をさらに広げるため、藤本さん以外の方々との接点を増やしたい。6月に行われたうどん作りの活動を参考に、今後も会の方々を講師として招き、佐野川の農産物を利用した料理を通しての交流会を定期的に行いたい。現時点では佐野川で収穫されたそばを利用したそば作りを近いうちに実施できるように話を進めて行く。
▽チームのあり方
私たち佐野川チームの組織的な問題点も存在する。メンバーの中に活動に対して消極的であったり、自分の意見を持たない人がいたり、なかなか情報伝達がうまくいかない傾向にある。それにより組織的な統率が緩い。これは現地の方からの信用にもつながるので、来年度以降はメンバーが顔を合わせてミーティングを行う機会を増やし、積極的にコミュニケーションが取れるようにして情報共有を図る。現在のミーティングの頻度は月1回あるかないかの程度なので、月2～4回と増やしていく予定である。
▽お茶の活用
お茶は佐野川で育てて収穫したものであるので、佐野川地域に還元していける使い道にする予定である。地域交流センターに所属する他の団体とのコラボレーションに使用していきたいと考えている。他サークルが行っているイベント等に参加することにより、佐野川の魅力を発信するうえで、さらに有効に活用されると考えられる。また、イベントに参加した他団体を佐野川に招いて活動を行えば、佐野川にもメリットがあるのではなかと考えられる。佐野川へ人を呼び込む活動にお茶を利用することで、佐野川の活性化につなげていきたい。

(7) その他
特になし

ゼミナール・HUCC助成金プロジェクト

# キラキラ星「中心子どもの家」(相模原市の児童養護施設)における育ちの支援

代表者：代表者：現代福祉学部　福祉コミュニティ学科　3年　安部 昴
学生：85人【4年：12人／3年：15人／2年：15人／1年：43人】

(1) 活動団体のプロフィール
キラキラ星はおよそ10年間、相模原市にある児童養護施設「中心子どもの家」に毎週土曜日に訪問させていただき、入所児童と遊んだり、出かけたりする活動をさせていただいております。この活動以外にも、地域の夏祭りや餅つきにもお手伝いとして参加させていただいたり、同じ施設でボランティアを行っている玉川大学の学生と研修合宿を行って児童とのよりよい関わり方を学ぶなどの活動をしています。
また今年度から、児童に様々な経験をしてほしいという考えのもと地域交流センターの助成金を頂き、年3回、施設内でスライムづくりやクリスマスポストカードの作成を行いました。

(2) 活動概要と目的・目標
毎週土曜日の午後、「中心子どもの家」を訪問し、入所児童とお話をしたり遊んだりする活動をメインに行っています。施設の子どもたちは4つの生活集団に分かれていて、学生は4年間、同じ生活集団の子ども達を担当します。このねらいは、そうすることによって学生と子どもの間に関係性が形成されることや、その生活集団の中での子ども同士、子どもと担当職員さんとの関係を理解しやすくなることが挙げられます。
我々の活動は大きく分けて2つの狙いの下に行われています。
1つ目は施設の子どもに向けた支援です。毎週顔なじみの学生が施設を訪れ、彼らの話を聞いたり、共に遊んだりすることは複雑な背景を持つ子供が多く入所している児童養護施設にとって大きな意義があることだと考えます。
2つ目は、入所施設が抱えやすい問題として施設の運営が閉鎖的になりがちであるという点に対する効果です。施設の人間に限らず多くの人間が施設にとって有益な形で関わる必要性があるのではないかという考えの下、に毎週訪問するということにこだわって活動を行っています。施設、ひいては施設に暮らす子どもたちにとってどのような関わり方が有益なのかを考えた活動を行っていきたいと考えています。

(3) 地域での連携
施設に通うボランティアとして、地域の夏祭りや施設が行う秋のバザーにお手伝いとして参加させていただいております。このような体験を通じ地域と施設がどの様な関係を持っているのか学び、施設が地域の行事に積極的にかかわることにどのような意義があるのかを考える良い体験となりました。

(4) 活動記録
●通常活動
去年の4月から今日まで、多摩祭（10月18日）と1月2日を除く土曜日に訪問し、活動または施設との研修を予定通り行うことが出来ました。1回あたり平均10人から20人ほどのメンバーが訪問。
●地域や施設のイベント
・7月18日、地域の夏祭りにお手伝いとして28名が参加。焼き鳥を焼いたりテントの設営などを行いました。
・10月24日、施設が主催して行う秋のバザーにもお手伝いとして参加しました。（学生参加２３名）
●特別活動
今年度から特別活動と称して年3回、土曜日の活動の際に子どもたちに興味を持ってもらえるような企画を用意し、実施しました。材料費は助成金を申請し、活用しました。
▽アイシングクッキー（7月25日）
クッキーに着色した砂糖で絵を描いてみんなで食べようという企画。
お菓子ということで子どもたちの食いつきもよく、20名以上の子ども達（幼児～小学生）がホールでクッキーに思い思いの絵を描いて楽しみました。参加学生21名。
▽スライムとクリスマスポストカード作り（12月19日）
簡単な理科の知識を用いて、洗濯ノリなどからスライムを作りました。さらに、ハサミで切り込みを入れることで立体的な絵が楽しめるクリスマスポストカードも併せて作りました。施設で暮らす幼児や小学生に好評で20名以上が参加してくれました。加えて、園に遊びに来ていた入所児童の学校の友達や個人でボランティアに来ていた方も子どもたちや学生と楽しい時間を過ごせていたのがうれしい誤算でした。参加学生18名。
▽プラバンを用いたキーホルダー作り（1月30日）
プラバンを使ってキーホルダーを作りました。オーブンを使う活動であったため、4つの生活集団ごとに分かれて行いました。児童の参加人数は12名ほどで、主に小学生が楽しんでくれたようでした。参加学生19名。

(5) 活動の成果・結果
●通常活動
　今年度は1度に訪問する学生の数を多く保つことが出来ました。多くの学生が訪ねることで児童がいろいろなタイプの人間と関わる機会にもなり、多

人数で遊ぶきっかけが今年度は多かったように思います。このことがもたらす成果としては、児童のコミュニケーション能力や幅広い遊びの創造が挙げられます。しかし一方、人数が多いことで、施設の方からいただいたアドバイスや課題の指摘を周知させることが出来なかったことが反省点として挙げられます。

●特別活動

特別活動は、児童にとっても我々学生にとっても成果の多い取り組みであったと考えています。

児童に向けて様々な体験を提供することが出来たこと、何よりこの活動を特に楽しみにしていたと言っていきいきと取り組む子どもたちの姿を見ることが出来たことが成果として挙げられます。その他にも、この活動を通して児童が、普段接するのとは違う別の生活集団を担当する学生とも関わることが出来ました。まとまった活動をすることで、法政大学のボランティアを、児童たちにより身近に感じてもらえることが出来たと考えています。

我々学生の得た成果もありました。どのような手順で行えばわかりやすいか、どのような危険があるか、またそれをどう排除するかを試行錯誤して真剣に考えたことは、今まで行ってきた取り組みとは少し違う新鮮な挑戦でした。学生が主体的に計画し行う活動は、学生の参加人数確保やモチベーションの維持にも大きな成果を見せました。

また我々の活動が施設にとって入所児童にとってどういう意味があるのか、ロードマップの作成や特別活動を行うにあたっておこなったミーティングを通して、参加者で考える機会を作ることが出来ました。

(6) 実績 (受賞、マスメディア掲載など)

今後の展望ですが、特別活動自体は施設職員の方々にも子どもたちにも概ね好評でしたが、特別活動を今後どのような規模・回数でどのような狙いのもとに行なうのか、あるいは行わないのかは、来年度サークルの運営を担う 2・3 年生で決断していく必要があると考えます。

なぜなら、この活動は、主に子どもたちの育ちに向けて効果の高い取り組みであることが分かりましたが、同時に、学生側の人数や資金の確保がサークルにとって高いレベルで必要だということも、今年度の活動を通して分かりました。通常活動があくまで活動の中心であり、中途半端な企画は施設の方々にも迷惑がかかることを理解し、運営の中心となる学生がこの活動にとらわれずに様々なアプローチを施設と児童たちにしてほしいと考えています。

その為にも、サークル全体で今年度行った通常活動と特別活動について考え、今後の展望について話し合う機会を設けることがサークルとして最も必要な現在の課題だと考えます。

(7) その他

今年度は特にありません。

2015 年度多摩地域交流センター

# 多摩地域形成論

第 1 回 (9/22) ガイダンス

「この科目をなぜ受講し、どのように学ぶか」

＊授業担当者
図司 直也 ( 現代福祉学部准教授 )

第 2 回 (9/29) 多摩キャンパス版「法政学」

法政大学と多摩キャンパスの歴史

＊授業担当者　馬場 憲一 ( 現代福祉学部教授 )

第 3 回 (10/6) 多摩キャンパスと近隣地域 (1)

多摩キャンパスで学び近隣自治体で働く卒業生の視点から学ぶ

＊ゲスト講師
廣瀬 桃子 氏 ( 八王子市学校教育部教育総務課 )
＊授業担当者
平塚 眞樹 ( 社会学部教授 )

第 4 回 (10/13) 多摩キャンパスと近隣地域 (2)

地域と元気な人たち

＊ゲスト講師　長島 剛 氏 ( 多摩信用金庫 価値創造事業部 部長 )
郡司 玲奈 氏（同金庫 同部 創業支援センター TAMA）
＊授業担当者　図司 直也 ( 現代福祉学部准教授 )

第 5 回 (10/20) 多摩地域の現代史 (1)

多摩の平和運動・基地返還運動と跡地の利用問題

＊授業担当者　岩橋 清美 ( 社会学部非常勤講師 )

第 6 回 (10/27) 多摩地域の現代史 (2)

「団地」形成とベッドタウンとしての多摩地域の形成

＊授業担当者　中筋 直哉 ( 社会学部教授 )

第 7 回 (11/10) 多摩地域の現在 (1)

近隣地域の産業の現状と課題を学ぶ

相模原市の産業／

株式会社さがみはら産業創造センター (SIC) ／

SIC の起業家たち

＊ゲスト講師　山本 満 氏 ( 株式会社さがみはら産業創造センター専務取締役 )
＊授業担当者　図司 直也 ( 現代福祉学部准教授 )

第 8 回 (11/17) 多摩地域の現在 (2)

あなたからはじまる、ごみ 40% 減量―町田市の現状と課題

＊ゲスト講師
塩澤 直崇 氏 ( 町田市環境資源部環境政策課 担当課長 )
新海 良文 氏 ( 同 課 政策係担当係長 )
＊授業担当者　西澤栄一郎 ( 経済学部教授 )

第 9 回 (11/24) 多摩地域の現在 (3)

高齢化と周辺化による地域形成の危機

＊授業担当者　宮城 孝 ( 現代福祉学部教授 )

第 10 回 () －休講－

第 11 回 (12/8)  これからの多摩地域の形成 (1)

コミュニティ・ビジネス

＊ゲスト講師　北池 智一郎 氏 ( 株式会社タウンキッチン代表取締役 )
＊授業担当者　図司 直也 ( 現代福祉学部准教授 )

第 12 回 (12/15) 多摩地域の現代史 (3)

くらしを守るたたかい―大型道路とごみ処理施設

＊ゲスト講師　木村 真実 氏（弁護士〔日野市民法律事務所〕）
＊授業担当者　島本 美保子 ( 社会学部教授 )

第 13 回 (12/22) これからの多摩地域の形成 (2)

コミュニティ文化とスポーツ

地域スポーツクラブの役割―FC 町田ゼルビアの取り組みから

＊ゲスト講師　守屋 実 氏 ( 株式会社ゼルビア相談役、
NPO 法人アスレチッククラブ町田理事長 )
＊授業担当者　三ツ谷 洋子 ( スポーツ健康学部教授 )

第 14 回 (1/13) これからの多摩地域の形成 (3)

八王子市シルバーふらっと相談室館ヶ丘とふらっとカフェ

の取り組み～モノとサービスを売る仕組みの活用～

＊ゲスト講師　今泉 靖徳 氏(八王子市シルバーふらっと相談室館ヶ丘室長)
＊授業担当者　平塚 眞樹 ( 社会学部教授 )

第 15 回 (1/19) まとめと今後に向けて

グリーンヒル寺田での動きを題材に

＊授業担当者
図司 直也 ( 現代福祉学部准教授 )
本野 直子 ( 多摩地域交流センターコーディネーター )

第 1 回　ガイダンス

# 「この科目をなぜ受講し、どのように学ぶか」

**授業担当者**　：図司 直也 ( 現代福祉学部准教授 )

多摩地域形成論は、多摩キャンパスの全学部全学年が履修できる、地域交流センターが中心となっている視野形成科目である。これからこの授業のねらいについて話したい。

多摩キャンパスでみなさん 4 年間生活するわけだが、都心から離れ通学時間も長く、遠くて便が悪いと感じている人もいるだろう。しかし、4 年間一つの地域で過ごすことは人生のなかで結構な割合で、貴重なことだ。ぜひ、多摩で過ごせて面白かったと思ってもらいたいと思っている。

みなさん多摩について知らないことがたくさんあるだろう。なぜ多摩地域にキャンパスがあるのか。多摩地域でどんな出来事が起きているのか、どんな人たちが生活していて、どんな活動が起こっているのか。ことによっては市ヶ谷よりも面白いことがある。ぜひこの地域で起こっていることを知って、「自分事」に置き換えて考えてほしい。社会人は他人のために仕事をする。今のうちに、社会のこと、他人のこと、地域のことを自分に結びつけて考える発想を身に付けることが大事だ。また、地域で活動している先輩たちもいるので、そうした活動を知るきっかけづくりの場にもしてほしい。

多摩キャンパスができて 30 年経った。15 回の授業は、まず法政大学多摩キャンパスの歴史からスタートする。毎回の授業は、多摩の各学部の先生方がバトンを引き継いでオムニバス形式で行っていく。また、できるだけ学外からゲスト講師をお招きして、現場のお話をうかがう。お越しいただくのは、自治体、金融機関、NPO、起業の支援など様々な分野の、みなさんの先輩を含む方々だ。歴史、産業、文化、スポーツなど多彩な切り口から、多摩地域でどんなことが起こっているか受け止めてもらい。

この授業は、もともと社会学部で行われていたが、2013 年に多摩地域交流センターが開設されたことをきっかけに今のスタイルにバージョンアップしている。大学に対しては、周辺の地域からいろいろな相談ごとが寄せられるが、センターはその窓口となる。また近年、「域学連携」という、地域の課題について大学と地域が連携して取り組む流れが全国的に始まっているが、センターはその連携の役割も担う。こうした動きの中で、地域の現場の話を学生のみなさんにも聞いてもらおうと、この授業が始まった。

多摩地域は東京全体より高齢化の進み方が早い。2025 年までに多摩地域は全て人口が減少し始める。また、既に働き手について言えば減り始めており、みなさんのアルバイトの時給が以前より上がっているのは人手不足が起こっている現れだ。授業では、このような客観的な数値データも示していくが、あくまできっかけだ。これから地域の学習を行っていくに際しては「Cool Head, but Warm Heart」を意識して、むしろデータで表される状況の中でどんな暮らしが営まれているか、どういう人たちが働いているか、どんな出来事が起きているか、現場のリアリティを捉えていってほしい。



第 2 回　多摩キャンパス版「法政学」

# 法政大学と多摩キャンパスの歴史

**授業担当者**　：馬場 憲一 ( 現代福祉学部教授 )

この授業の目的は、法政大学と多摩地域の関わりを学び、次回以降の講義の中で多摩地域を学ぶ上でのアイデンティティ ( 自己同一性、自分自身のよりどころ ) を考えていくことである。

1. 法政大学の歴史

■創設から現在の法政大学となるまで

1880 年 4 月に金丸鉄 ( まがね )、伊藤修によって東京法学社が設立されたのが法政大学の始まりである。設立の背景としては、国会期成同盟が結成され、自由民権運動が高揚していたことや、近代的法制の整備が緒についた時期だったことが挙げられる。その後、東京法学社のなかの講法局が東京法学校として独立 (このとき政府の法律顧問だったボアソナードを教頭として招聘) 。以降は、和仏法律学校、財団法人和仏法律学校法政大学と名称を変更し、1920 年に大学令により財団法人法政大学となった (法学部と経済学部を設置) 。やがて戦後、1949 年 4 月に学校教育法により新制大学として発足、現在の大学の形態となった。

■多摩への移転

1960 年代の高度経済成長によって大学進学率が急上昇し、キャンパスは過密状態となった。こうしたマスプロ教育を解消し、「本物の教育」を実現したいとの志向が教員の間に起こった。また、1960 ～ 1970 年代の大学紛争で荒廃した大学を再生・発展させるために学部棟を中心に「学部一貫教育」を行いたいと言う考えが生じたことも背景に、多摩へのキャンパス移転の運びとなった。1984 年に多摩キャンパスが開校し、2015 年でキャンパス創立 31 周年を迎えている。

■法政大学の学風

法政大学は創立以来 135 年という歴史の営みの中で「自由と進歩」という学風を築き上げてきた。戦時中はこの学風に反するような大学の姿もあったが、戦後は 1983 年から始まった「法政平和大学」に代表されるように“戦争・平和・反核”というテーマに真摯に向き合ってきた歴史がある。

2. 多摩キャンパス前史とモニュメント

(1) 多摩キャンパスの概要

「郊外型キャンパス」で広大な敷地を持つ。面積は 82 万 4000㎡、東京ドーム 17.6 個分、東京ディズニーランドに匹敵する。緑が豊かで、面積の半分は保存緑地となっていて多くの自然を残している。野鳥のために夜の照明を抑えるなどの配慮もなされている。

(2) 埋蔵文化財に見るキャンパス前史

多摩キャンパスは多摩丘陵を造成して開校されたキャンパスだが、造成工事に先立って、埋蔵文化財の発掘調査が 1976 年から 10 年近くかけて実施された。その調査によって多数の石器や縄文土器、須恵器・貨幣などが発見され、この地が数万年前から人々が生活していた所であったことが明らかになった。また、1945 年に「ポツダム宣言受諾」のニュースを世界に向けて発信したと伝えられる多摩送信所があった場所でもあり、多摩キャンパスは開校されるまで人々の暮らしとその歴史が刻まれた環境の中にあった。

(3) 戦争・平和・反核の「記憶の場」

多摩キャンパスには戦争と平和、反核に関わるモニュメントがある。法政大学を巣立った卒業生や教員が平和希求への強い意志を学生たちに伝えたいという想いから作られた。

そのモニュメントとして、経済学部同窓会が学徒出陣など戦時下の学生の苦難を伝えようと建立した「平和祈念碑」をはじめ、「多摩送信所跡記念碑」「泉－不戦の誓い」「夢」などがあり、記憶を想起させる場所となっている。

3. 多摩キャンパスと地域文化活動

多摩キャンパスの主な文化活動としてはこれまで寺社文書の調査（1986 年〜）、「多摩の歴史・文化・自然環境研究会」の発足（97 年〜）、多摩シンポジウムの開催（84 年〜）などを行ってきた。

今後の取り組みとして、「地域まるごとミュージアム」構想を検討している。「武相学」をベースとした研究活動や、学内外の文化・歴史遺産などをつなぐ活動拠点の設置、活動や事業の実施に向けた研究者、地域住民、学生への参加の呼びかけを行っていく。

まとめ

今回の授業では以下の 5 点を特に認識をしてもらいたい。

・135 年の歴史の中で築き上げた「自由と進歩」という学風

・多摩キャンパスは多摩丘陵の自然や歴史環境の保全に配慮している

・多摩への移転はマスプロ教育の解消・学部一貫教育の実現が背景

・多摩キャンパスには戦争や平和・反核に関するモニュメントがあり、それらの課題に向き合ってきた

・多摩キャンパスは文化活動を通じて地域との良好な関係を築きあげている

地域を学ぶに先立って、自らのアイデンティティ――どういうところに自分のよりどころあるのか――を知る意味は大きい。今回の講義を踏まえて多摩キャンパスで学んでいる自分を認識し、多摩地域研究を深めて全国の地域のあり方に迫る一歩にして欲しい。



第 3 回　多摩キャンパスと近隣地域（1）

# 多摩キャンパスで学び近隣自治体で働く卒業生の視点から学ぶ

**ゲスト講師　：廣瀬 桃子 氏 ( 八王子市学校教育部教育総務課 )**
**授業担当者　：平塚 真樹 ( 社会学部教授 )**

2010 年に法政大学現代福祉学部を卒業して八王子市役所に入庁した。生まれ育ったのは目黒区・世田谷区で、八王子には高校から住み始めた。

八王子市は大正 6 年に市制施行され、2017 年で 100 周年を迎える。面積が 186.38 平方キロメートル、人口 562,619 人で、立川市と比べて面積が 7.5 倍、人口が 3 倍、面積、人口ともに多摩地域で最大だ。これほど大きいのは、様々な町村の合併によってできたからだ。そのため、市内の地域ごとに特徴があり、それぞれの地域の特色に合わせた取り組みが必要だ。

人口ピラミッドを相模原市と比較してみると 20 〜 24 歳人口が多い。八王子が 21 の大学を抱える学園都市であるためだが、一方で 25 〜 30 歳の人口は落ち込んでいる。これは卒業すると転出してしまうせいだ。高齢化の状況を見ると、平成 22 年までの 10 年間で、館ヶ丘や寺田の団地では 10 ポイント上昇と、急速に高齢化が進んでいることがわかる。これらの団地では法政の学生たちが活性化の活動をしているが、そうした取り組みが今後、重要になってくる。

東部のニュータウンは、現在はまだ比較的高齢化率は低いが、高齢化は進んで行く。市全体で対策に取り組んでいく必要がある。人口は、東京都全体と同じく、平成 32 年度をピークに微減していく。若い人たちに大学卒業後も定住してもらい、高齢者サービスの人材となってほしいし、人口も維持したい。そこでは「都市間競争」がキーワードとなる。地域に合ったまちづくり、地域の魅力・特色が必要となってくる。

大学時代の活動で得たこと

大学時代、障害者支援サークルでボランティアに取り組んだ。友人に誘われて始めたのだが、障害のある方々との関わりの中で、その方の障害や性格に合うやり方を工夫して、できなかったことができるようになって喜んでもらえた。様々なコミュニケーションの方法を学び、心が通じあえたと感じられると、すごく嬉しかった。聴覚障害学生向けのノートテイクにも取り組んだ。こうしたボランティアを通して、障がいのある人それぞれにサポートのし方があること、そのためにコミュニケーションを取ることが大事で、そのための場が必要であると視野が広がった。

また、現代福祉学部で募集していた海外研修に参加したことも大きな経験となった。福祉先進国のスウェーデンで衝撃を受けた。一つは、視覚的に障がいのある人にとって使いやすい福祉器具が使われていたり、介助者を支援する機器も工夫されていること、介助者の夜勤の負担を軽減したり休みを取りやすくしてワークライフバランスを大事する体制があることだった。「頑張りすぎると疲れちゃうでしょ」と、介助者もサポートを受けやすい環境になっている。サポートする人もされる人も、一緒に力強く生きていける社会が大切だと感じた。また、もう一つ衝撃を受けたことは、市役所に隣接して障がい者施設があることだった。市民と障がい者が公共空間でいつでも身近に触れ合え、平等にやっていく環境づくりがなされている。自然と障がい者への理解促進につながっているように思われ、そういう場づくりを自分でもやりたい！という強い気持ちを持つようになった。

八王子市役所の仕事を通して

家族も公務員だったので公務員を志望していたのだが、海外研修が具体的な目標につながった。採用面接で「共生できる場づくり」の話を真剣に聞いてもらえた八王子市に入った。しかし、最初に配属されたのは、ハード寄りの都市計画部だった。

この部署では、行政として土地利用の方針「都市計画マスタープラン」をつくり、計画通りに建物ができているかチェックしたり、プランに照らしてこんな建物をつくっていいかといった相談を受けることが主な仕事だった。ある日、原則開発できない「市街化調整区域」に高齢者福祉施設をつくりたいという相談を受けた。市街地ではなく調整区域に建てようとする根底に、住民の反対があるとの事業者の話にショックを受けた。一方、福祉に役立つものならどんどん作ろうというのではなく規制があるのは、地形などの安全面も考慮してのことだとわかった。別の視点からも

福祉を考えなければならないことを理解した。

その後、八王子駅の南口周辺地区まちづくり方針策定に携わった。医療刑務所がなくなって地域が大きく変わることになり、ソフトの視点、福祉の視点を入れたまちづくりをしたいと提案した。高齢者や子育て中の人、障がい者にもメンバーになってもらい、様々な視点を踏まえながら方針の策定を考えた。障害者目線での歩きやすい道づくり、子育て目線での子供が安心して遊べる公園などの提案が出てきた。地域住民と行政がいっしょに話し合ってまちづくりをする「エリアマネジメント」の手法で、まず、住民、NPO、企業が課題や魅力を考え、続くステップで、魅力を活かしたイベントを実施し、最後に出て来た改善点を踏まえて活性化策を考えた。様々な人を巻き込む考え方を入れることができた。

受講生へのメッセージ

学生の皆さんには、自分なりの切り口、自分の好きなことを探してもらいたい。社会人になると時間がない。学生の間にいろんな体験をしてもらいたい。また、様々な地域・国に行って新しい価値観、考え方を養ってもらいたい。最後に、複数の視点で物事を見ることを学んでほしい。これは正しく判断する力をつけるために必要なことだと思う。



第 4 回　多摩キャンパスと近隣地域 (2)

# 地域と元気な人たち

ゲスト講師　：長島 剛 氏 ( 多摩信用金庫 価値創造事業部 部長 )
郡司 玲奈 氏 ( 同金庫 同部 創業支援センター TAMA)
授業担当者　：図司直也（現代福祉学部准教授）

1. 多摩地域とは (長島氏)

多摩地域は、東京都の中の 30 市町村 (26 市 3 町 1 村) から成る地域で、▽自然環境の豊かさ、▽大学・高専の数の多さ、▽芸術・文化、という特徴に加え、かつて軍需産業が盛んだった背景から、▽研究開発型企業の多い、という特色がある。

多摩地域の社会人口動態を見ると、1996 年以前は東京 23 区から引っ越してくる人による人口流入が多かったが、1996 年以降は 23 区内からの流入者数は減少して、他県からの流入者が多くなった。まだ人口の社会増が続いてはいるが、この先きびしくなるなか、地方創生をどうしていくかという問題が出てくる。多摩地域は東京都の一部であるが、多摩でくくった場合には都道府県庁に当たる行政機関がなく、他の行政機関と同じことをやっていては上手くいかないという特徴がある。

多摩地域の事業所集積は、JR の中央特快が止まる駅や京王線の特急・準特急が止まる駅の周辺に集中しており、それ以外のエリアに住宅が集中しているという様子である。多摩地域の経済規模は特別区に比べると少なく、東京都周辺では埼玉県、千葉県に近い。産業の特徴では、地域別特化係数を参考にすると精密機器・情報通信・研究機関等の値が高く、前に述べた軍需産業が盛んだった背景が見て取れる。

また、多摩地域を 1 つの県と見立てて他の都道府県と比較すると、大学数が第 4 位と多いのが最大の特徴であり、その他に認証 NPO が第 9 位、人口が第 10 位にランクするといった特徴が見て取れる。

2. 信用金庫と多摩信用金庫 (長島氏)

信用金庫には二つの特徴があり、▽地域金融機関であることと、▽協同組織金融機関であること、が挙げられる。地方銀行は株式会社であるのに対し、信用金庫は協同組織なので、株主のためではなく、地域のための業務ができる。信用金庫は金融的機能だけでなく地域のコンサルタント機能が求められ、地域の課題解決活動の実践を目的としているところが一般的な銀行との大きな違いだと意識してほしい。

多摩信用金庫は昭和 8 年 12 月 26 日に有限責任立川信用組合として設立。平成 18 年に合併により多摩信用金庫に改名した。総職員数はパートも含め 2246 名 (27 年 3 月現在 ) に上り、総預金額は 2 兆 5873 億円、総貸出金は 1 兆 36 億円にも及ぶ。

3. 私と信金とキャリアデザイン (郡司氏)

私は法政大学在学中、現代福祉学部保井美樹教授のゼミに所属し地域支援や地域の活性化について学び、商店街はどうしたら元気になるかなど考えた。卒業して平成 23 年に多摩信用金庫に入り、現在 5 年目だ。

なぜ今の仕事に就いたのか。きっかけとしては、ずっと多摩地域に住んでいたこと、人が好きで現場感のある仕事がしたかったことがあったが、加えて、人と近く長く深く関われる仕事がしたいと思ったことから就職活動中に多摩信用金庫に注目するようになった。大学での学習で地域活性化に興味があり、多摩信用金庫の「地域密着」というワードに心が惹かれた。また、生まれ育った多摩地域に愛着があり、単純に商品を売るのでなく、お客さんが何を必要としているのか考えて提案するスタイルに魅力を感じ、多摩信用金庫への入庫を決意した。

多摩信用金庫に入って初めに調布支店でシニア総合アドバイザーとして外回りをした。年金や地域の情報をお客様に届けつつ、商店街の祭りに参加するなどして、だんだんとまちの一員になって地域との距離が近くなっていくプロセスに楽しさを感じた。

価値創造事業部に異動してからは、どうしたら多摩地域の事業を増やしてまちを豊かにしていけるかに取り組んでいる。「ミニブルームカフェ」では、起業して数年以内の人を招いて、経験をシェアしたり相談にのったりしている。「セミナー・創業塾」では、飲食店開業希望者向けに創業塾を実施し、最後にマルシェで実際に販売をしてもらったりもする。さらに、地域には創業を応援する側の人

1. 多摩地域とは（長島氏）

多摩地域は、東京都の中の 30 市町村（26 市 3 町 1 村）から成る地域で、▽自然環境の豊かさ、▽大学・高専の数の多さ、▽芸術・文化、という特徴に加え、かつて軍需産業が盛んだった背景から、▽研究開発型企業の多い、という特色がある。

多摩地域の社会人口動態を見ると、1996 年以前は東京 23 区から引っ越してくる人による人口流入が多かったが、1996 年以降は 23 区内からの流入者数は減少して、他県からの流入者が多くなった。まだ人口の社会増が続いてはいるが、この先きびしくなるなか、地方創生をどうしていくかという問題が出てくる。多摩地域は東京都の一部であるが、多摩でくくった場合には都道府県庁に当たる行政機関がなく、他の行政機関と同じことをやっていては上手くいかないという特徴がある。

多摩地域の事業所集積は、JR の中央特快が止まる駅や京王線の特急・準特急が止まる駅の周辺に集中しており、それ以外のエリアに住宅が集中しているという様子である。多摩地域の経済規模は特別区に比べると少なく、東京都周辺では埼玉県、千葉県に近い。産業の特徴では、地域別特化係数を参考にすると精密機器・情報通信・研究機関等の値が高く、前に述べた軍需産業が盛んだった背景が見て取れる。

また、多摩地域を 1 つの県と見立てて他の都道府県と比較すると、大学数が第 4 位と多いのが最大の特徴であり、その他に認証 NPO が第 9 位、人口が第 10 位にランクするといった特徴が見て取れる。

2. 信用金庫と多摩信用金庫（長島氏）

信用金庫には二つの特徴があり、▽地域金融機関であることと、▽協同組織金融機関であること、が挙げられる。地方銀行は株式会社であるのに対し、信用金庫は協同組織なので、株主のためではなく、地域のための業務ができる。信用金庫は金融的機能だけでなく地域のコンサルタント機能が求められ、地域の課題解決活動の実践を目的としているところが一般的な銀行との大きな違いだと意識してほしい。

多摩信用金庫は昭和 8 年 12 月 26 日に有限責任立川信用組合として設立。平成 18 年に合併により多摩信用金庫に改名した。総職員数はパートも含め 2246 名（27 年 3 月現在）に上り、総預金額は 2 兆 5873 億円、総貸出金は 1 兆 36 億円にも及ぶ。

3. 私と信金とキャリアデザイン（郡司氏）

私は法政大学在学中、現代福祉学部保井美樹教授のゼミに所属し地域支援や地域の活性化について学び、商店街はどうしたら元気になるかなど考えた。卒業して平成 23 年に多摩信用金庫に入り、現在 5 年目だ。

なぜ今の仕事に就いたのか。きっかけとしては、ずっと多摩地域に住んでいたこと、人が好きで現場感のある仕事がしたかったことがあったが、加えて、人と近く長く深く関われる仕事がしたいと思ったことから就職活動中に多摩信用金庫に注目するようになった。大学での学習で地域活性化に興味があり、多摩信用金庫の「地域密着」というワードに心が惹かれた。また、生まれ育った多摩地域に愛着があり、単純に商品を売るのでなく、お客さんが何を必要としているのか考えて提案するスタイルに魅力を感じ、多摩信用金庫への入庫を決意した。

多摩信用金庫に入って初めに調布支店でシニア総合アドバイザーとして外回りをした。年金や地域の情報をお客様に届けつつ、商店街の祭りに参加するなどして、だんだんとまちの一員になって地域との距離が近くなっていくプロセスに楽しさを感じた。

価値創造事業部に異動してからは、どうしたら多摩地域の事業を増やしてまちを豊かにしていけるかに取り組んでいる。「ミニブルームカフェ」では、起業して数年以内の人を招いて、経験をシェアしたり相談にのったりしている。「セミナー・創業塾」では、飲食店開業希望者向けに創業塾を実施し、最後にマルシェで実際に販売をしてもらったりもする。さらに、地域には創業を応援する側の人もいて、チームを組んでもいる。

様々な起業の実例があるが、人の夢を応援できるのはとても楽しいと感じている。信用金庫は思っていた以上に人に関わることができ、やりがいがある職場だ。これからみなさんも進路を考えると思うが、ぜひ地域に目を向けてほしい。

4. 多摩地域で活躍する人たち（長島氏）

元気な地域の人たちを紹介する。これらの元気な人のところに、会いに行って話を聞くなど、ぜひ飛び出して行ってほしい。

①株式会社 MNH（調布市）

MNH は「みんなで日本をハッピーに」の略。八王子の NPO で経験を積んだ人物が社長となり、かりんとう企画業を展開。製造委託や材料入手で地域の様々な事業者や福祉作業所などをつないでネットワーク化し、それぞれにもうけをもたらしている。大ヒットしている高尾山のしょう油かりんとうや、サンリオピューロランドのいちごかりんとうを仕掛け、昨年の中小企業白書にも掲載されている。

② NPO 法人ちょうふ子育てネットワーク・ちょこネット（調布市）

「AONA」という子連れの母親向けのレストランを運営し、不安を抱える育休中の母親たちに居場所と社会とのかかわりを提供すると同時に、60 名以上の雇用も生み出している。市との協働事業で、市が家賃を負担して運営を NPO が担当している。

③認定 NPO 法人育て上げネット（立川市）

ひきこもりの若者などへの就労支援を行っている。従業員は 100 名超、売上も億単位に上っている。このようにビジネスをしっかり展開し、金融機関からお金を借り、従業員を雇用し、地域の課題解決に取り組む NPO が出てきている。

④株式会社キャリア・マム（多摩市）

女性が女性らしく働いていくため、女性を応援する会社。全国に 10 何万人の主婦のネットワークを作り、女性向け商品のモニター調査などマーケティング調査を事業としている。多くの女性たちが生き生きと働いている。

⑤株式会社まちづくり立川

立川駅南口でかつての商店がビルに変わり、ビルオーナーとなった元商店主たちがまちの活性化に取り組もうと作ったまちづくり会社。一橋大学新卒の女性を社長に据え、南口で八百屋「のーかる」（元農協の直売所だったのを、地元の野菜ニーズに応えるため引き継いだ店）を経営したり、地域系クラウドファンディングの FAAVO 多摩中央も運営している。

⑥株式会社エマリコ国立

大学時代 NPO でまちの活性化に取り組んだ後、三井不動産に入ったが、まちづくりを志して国立に戻った人物が社長。地元の農家から朝採れ野菜を仕入れて売る八百屋を経営。農家が高齢化しているため、朝、店が農家を回って集荷して売っている。ワインバーを地元の酒屋の協力で開いたり、西国分寺でも八百屋をオープンしたりもしている。

⑦株式会社タウンキッチン（小金井市）

コンサルタントから脱サラし、惣菜屋を小平にオープン、次いで小金井でインキュベーションセンターの運営を始める。立川のコワーキングスペース、大学のカフェなど、地域に向けたビジネスを手掛けている。

⑧奥多摩トレックリング（奥多摩町）

サラリーマンが土日のみの副業としてレンタサイクル会社を立ち上げた。自分の夢の実現の一つの形。

⑨株式会社 FIO（八王子市）

多摩地区にはまだ農業が残っているが、付加価値をつけなければ存続できないと、地元の人と共に考え取り組んでいる。東京都が去年から多摩地域の新規就農者に 3 年間 150 万円の給料を保障してくれる制度が始まり、新規就農者が出てきて休耕田などが動き始めている。

⑩株式会社東京・森と市庭（奥多摩町、国立市）

林業にも若者が入り始めている。岡山で林業を通じたまちづくりをしてきたメンバーが、東京でも林業再生を始めた。多摩産の材木を床材にするなどして利用を促進すると同時に、地域の起業支援や、廃校になった小学校をイベントや研修のためのスペースとして運営し都心の人を呼び込む仕掛けも行っている。

第 5 回　多摩地域の現代史 (1)

# 多摩の平和運動・基地返還運動と跡地の利用問題

授業担当者　：岩橋 清美 ( 法政大学経済学部兼任講師 )

多摩地域には戦争の跡が数多く残っている。高尾駅のホームの鉄柱には八王子空襲の機銃掃射の跡が残っている。国道 16 号は 4 車線のところもあり広いが、立川から軍用機を運べるように広さが確保された名残だ。相模原市には基地が多いが、戦前に「軍都」として陸軍施設が置かれたことに端を発し、戦後は米軍に接収された。相模原の米軍基地は補給や通信の基地で、沖縄などと性質は異なるものの住民にとっては不安・負担となるもので、基地反対運動・返還運動が盛り上がり、返還がなされた。そうした歴史を、文字史料として記録されていない、地区の人たちのくらしの面から見ていきたい。

・なぜ多摩・相模原地域に基地が多いのか

相模原はもともと広大な原野だったが、深く井戸を掘っても水が出ず、作物も桑や麦しか作れないため、住む人が少なかった。そこに陸軍が目をつけ、1930 年代以降、急速に軍都化が進んだ。1937 年に陸軍士官学校が建設されたのを皮切りに、陸軍病院、兵器製造所、通信学校などが設立された。1945 年 8 月の敗戦で、同年 9 月 2 日にはこれらの軍施設が米軍に接収され、その後市民たちの大きな悩みの種となることになった。

・キャンプ淵野辺返還に向けた由野台地域の人々の運動

相模原市は昭和 29(1954) 年に市制を敷き、人口 8 万人だったが、高度成長期にあって企業・工場を誘致し、勤労者とその家族を吸収、昭和 30 年代は全国でもまれは人口急増地域となった。キャンプ淵野辺のゲート前の由野台 1 丁目では、昭和 40 (1965) 年ごろから宅地化が始まり、どんどん民家が増えて住宅街となっていった。公園や幼稚園バスのバス停もゲート近くにでき、人々は不安を感じながら暮らしていた。

昭和 42 (1967) 年、アメリカ政府が日本政府に対して全国 12 箇所の通信施設周辺を電波障害制限地区に制定すると伝えた。キャンプ淵野辺周辺も生活制限の対象となったのである。冷戦下にあって電波傍受を妨げになるという理由で、半径 1.6 キロメートル範囲を対象に、▽鉄骨、鉄筋の建物の禁止 ( 屋根等含め )、▽ 2 階建ての禁止、▽テレビ・ラジオの使用禁止、▽隣接する道路は自動車の通行は 1 時間 5 台まで、といった内容で、普通の市民生活を不可能にするような、非常に厳しい制限が課された。

これに対し、ゲート付近に住む約 20 軒の家が反対運動に立ち上がった。治外法権であったために国・県・市は対応しなかったが、署名運動や、府中の基地へ英文で嘆願書を提出するなど、さまざまな活動を行ううちに運動は広がっていき、1968 年には 6000 人がゲート前で開催した集会に参加するまでになった。その結果として同年、電波障害制限地区の指定の見送りを勝ち取り、市内の同じような地区を動かすこととなった。また新たに、基地の早期返還に向けての戦いが新たに始まった。

1971 年に相模原市米軍基地返還促進市民協議会が発足した。この協議会が行った基地利用のアンケート調査では、基地被害として「騒音」を挙げる人は 80% だったが、「うるさくて我慢できない」は 35% に留まった。それでも「米軍に移転してほしい」と人々が要望した背景には、目には見えにくいが、生活を脅かす被害・悩みの存在があった。地域では自転車などの盗難が頻発したし、外国人の子どもたちが庭先に入り込むといったこともあった。夜のスナックからは米国の軍人と女性たちの嬌声が聞こえた。日常生活の安全が脅かされるこうしたこと、市史には書かれないようなことが本当の基地被害で、これが返還への願いとなった。1974 年にキャンプ淵野辺は返還された。

・返還後の跡地利用を方向づけた人々の願い

返還後の跡地利用にあたって、大蔵省は「有償 3 分割方式」を打ち出し、地元は再び壁にぶつかった。長年我慢してきた地元に無償で還元される形ではなく、国・市・住民の間で軋轢が生じた。

キャンプ淵野辺の返還で地域住民が願ったことは、安全な学校がほしい、安全に子どもが遊べる公園をつくってほしい、といったことだった。最終的に、基地の跡地には淵野辺公園や学校が造られ、国民生活センターや東京国立近代美術館フィルムセンター、宇宙研究事業本部 JAXA、相模原市立博物館などが完成し、文教地区となって市民が利用できる環境になっている。

また現在、相模原市は「はやぶさの故郷」を掲げてまちづくりを推進し、宇宙と絡めた名前を商店街につけるなどしてまちの振興を図っている。また、地域の大学との連携も進めようとしている。

戦闘機の発着もなく軍艦が着港することもない相模原だが、2015 年 8 月には米軍基地内で爆発事故が起こり、原因はいまだ解明されていない。現在も米軍基地の隣に拠点病院や学校など市民にとって重要な施設が建っていて、今なお基地問題は残っている。基地がある以上、常に危険が近くにあるということを念頭に置いて生活しなくてはならない。今日話したような、歴史の本には載っていないことが基地周辺の生活の真実であることを知っていただきたい。基地問題を身近に感じ、安保法制なども自分自身の問題として考えてみて欲しい。

第 6 回　多摩地域の現代史 (2)

# 「団地」開発とベッドタウンとしての多摩地域の形成

授業担当者　：中筋 直哉 ( 社会学部教授 )

都市社会学の分野で多摩地域を語るときに「団地」、「ベッドタウン」、「ニュータウン」という用語は欠かせない。用語としての「団地」は住宅団地の略である。1 街区に同様な家並みが続く、均質な住宅地を指す。典型的には中層(4 ～ 5 階)の集合住宅の連なりである。「ベッドタウン」は、職住分離型の都市圏において、住機能だけに特化した街区を指す和製英語である。「ニュータウン」も日本独特の意味が賦与されていて、複数市町村にまたがる造成によってできた都市的な地域を指す。職住分離型であるが、職場以外の機能が都市計画の専門家によって考えて配置されていることが特徴だ。

メディア作品でイメージとしての多摩ニュータウンが現れた例を見ると、『ウルトラセブン(第 47 回) あなたはだぁれ?』(1967 年 )、『平成狸合戦ぽんぽこ』(1994 年) などがある。『ウルトセブン』では、ベッドタウン、ニュータウンの異世界性と住民の均質性が描かれていた。『平成狸合戦ぽんぽこ』は、ニュータウン建設にあたって狸たちが住む場所を奪われ、狸として山奥に引っ込んで暮らすか、人間に化けてニュータウンに暮らすかの葛藤を描いた作品である。ニュータウン住民も実は地方から出て来た人が多いというオールドな地層、住民の出自の多層性が括り出されている。

戦後におけるニュータウンの歴史的な成り立ちを見てみると、日本住宅公団の成立により始まる。戦災復興のための住宅供給と都心のスラムクリアランスを目的に開発が進められた。さらに、社会的な背景として、高度経済成長下の大都市への人口集中により一層開発が進んだ。「核家族 ( 化の欲望 ) を容れるハコ」( 上野千鶴子 ) として団地が必要とされた。

このほかにも、国土計画上の首都形成と東京巨大化抑制のせめぎ合いや、あらゆる階層での住宅不足の解決のための多階層的宅地開発からニュータウン開発が進んだ。

戦争を受けて、戦後は子どもを育てて家族を養っていくことが人間らしさであり大事なことであるという「生の哲学」(内田隆三) が団地で全面的に花開いた。

明治期、三多摩地域は自由民権運動が盛り上がった地で、なかなか国の方針に従わない地域であった。その影響もあり開発はあまり進まなかったが、戦後里山の辺縁でスプロール開発が進み、かつての農地はどんどん宅地になっていった。これらの農地改革後の分家の利害が、戦後の多摩ニュータウンの大きなポイントである。この地域は、もともと東京中心部を空襲による焼失から守るために設けられたグリーンベルトの外で、鉄道を付けるところから始めなければならず開発は難航した。最初は 30㎢に 30 万人を詰め込む構想だったが、現在は約 19 ～ 20 万人が生活している。30 年かけて少しずつ順番に開発していったので、古い街並みと新しい街並みが共存している。

ニュータウンができると、交通機関やインフラの未整備や消費生活に対して「団地エネルギー」と言われるような住民運動が展開され、革新政党支持が強い地域となっていった。市民祭りも盛んだったが、現在は高齢化が進み空き室が深刻化し、かつての活気は無くなってしまった。

ただ、多摩ニュータウンは第 2 世代に高評価を得て、第 2、第 3 世代と住み続けようという動きがある。高齢化が進むものの「限界団地」のようになって団地が消滅するような事態には陥っていない。多摩ニュータウンが相対的に都心に近く 1 時間もかからず都心に出られる点が大きな魅力で、UR(都市再生機構。昔の住宅公団) による団地のリノベーションや建て替え、団地周辺の戸建て化も進んでいる。

近年は福祉の仕事やロードサイドの飲食店など非正規ではあるが様々な雇用が生まれ、地元で働くことが不可能ではない。フルタイムワークの集積はできなかったが、家はあるので非正規の雇用に就いてゆるやかに生活する道も出てきている。製造業や情報産業のようなグローバル企業ではなく、身近な福祉、購買、飲食など生活消費を経済的基盤とする社会としての持続的成長も注目されている。

また、多摩ニュータウンに残された農地・緑地の保全が価値を持ちつつある。「野菜づくりをする市民農園」「自分が散歩をする公園」があることで、「故郷化」する可能性もある。人々が関わり合いながら、自分たちのまちの農地、緑地を保全したり販売して分け合ったりするといった「スモールコミュニティ」とも呼べるような生活がまだできる状況にあることがもう一つの魅力だ。

多摩ニュータウンを代表する NPO に「フュージョン長池」がある。地域のニーズをビジネスとして興す「まち仕事づくり」における営利型 NPO として注目された。近年は、ベンチャーの不安定性を脱し地元住民により広く密着して活動・運営を行うため、公園の指定管理者になって公園を基盤としたふるさとづくり、まちづくりを目指す方向に転換し、地元に生まれ育った第 2 世代にバトンタッチしようとしている。人々の暮らしに対するサービスを仕事にしていくことで定住者たちが継続的に住んでいくような、職住近接型のニュータウンに (全面的ではないとしても) 変わっていくかもしれない。

第 7 回　多摩地域の現在 (1)　近隣地域の産業の現状と課題を学ぶ

# 相模原市の産業／株式会社さがみはら産業創造センター (SIC) ／ SIC の起業家たち相模原市の産業／株式会社さがみはら産業創造センター (SIC) ／ SIC の起業家たち

ゲスト講師　：山本 満 氏 ( 株式会社さがみはら産業創造センター専務取締役 )
授業担当者　：図司 直也 ( 法政大学現代福祉学部准教授 )

1. 相模原の産業

相模原市は都心から約 40㎞。人口は約 72 万人で、周辺の都市と合わせると 200 万人を超える。製造業が盛んで内陸工業都市とも呼ばれた時代もあり、事業所が 1000 社、工業製品出額は約 1 兆 1400 億円になる。また、周辺には多くの大学があることも特徴の一つである。「人口の集中」「産業集積が厚い」「大学がある」、この 3 要素は産業を興せる素地があるということだ。

相模原市で工業が盛んな理由の一つには 1930 年代後半に陸軍が軍需工場を中心に産業基盤を整備しようとしたことがある。また、戦後、高度経済成長期に入ると相模原市は工場誘致条例を制定して、カルピスなどの企業を誘致した。さらに 1950 年代後半になり、工業等制限法などにより都心の工場が移転を余儀なくされると、相模原が移転先の受け皿となったことも産業発展につながった。三菱重工業が相模原に移転してきたほか、NEC、東プレ、日本板硝子などが工場を相模原に置くなど工場数も飛躍的に伸びた。1990 年に事業所数はピークを迎え 1477 となり、製品出荷額は約 2 兆円になったが、その後、日本経済が停滞期に入り減少に転じた。工場は地方や海外に移転し下請け構造は崩れ、国内工場の機能も変化した。その一方で人口の増加は続き、相模原市では住宅が増加しベッドタウン化しつつある。

2. さがみはら産業創造センターについて

相模原産業創造センター ( 以下 SIC ) は 1999 年、相模原市と相模原商工会議所、中小企業基盤整備機構の出資で設立された。インキュベーター (ビジネスインキュベーター) とは、起業家を育成する施設のことで、支援するスタッフもいる。有望な起業志望者を選別し、スペースを提供しながら、集中的な支援を行い地域産業に貢献できる企業に育てている。

2000 年に創業間もない企業向けの施設として「SIC-1」を、2002 年には起業後の初期段階を終えある程度大きくなった企業を受け入れる「SIC-2」をつくり、さらにシェアタイプの施設などを整備し規模を大きくしてきた。

SIC では、インキュベーションマネジャーが起業家に資金、販路開拓や研究に対して助言したり、起業家と各種専門家や大学、メンターなどをつなぐコーディネートを行っている。また、交流会やセミナーなども行いながら起業家を応援し、7 年以内に大きくすることを目指している。

どの自治体も税収増を目指して企業誘致を行ってきたが、シャープを誘致した亀山市の例ではないが、ダメになるのも早い。そこで、相模原市では自分たちで企業を作り出すことに方向転換した。しかし、ベンチャーは雇用効果や収入への効果はさして大きくないという現実もあり、相模原市では、誘致と創業支援の 2 本立てとしている。

SIC では次代の人材育成のために、「子どもアントレプレナー体験キャンプ」や、大学生向けの「SIC アントレ・インターンシップ」など、起業体験プログラムを実施している。ぜひ参加してほしい。また、「サガツクナビ」という就活生向けの情報サイトで、相模原市の企業紹介やインターン募集なども行っている。

3. SIC の起業家

SIC には約 120 の部屋があり約 100 社が入居している。美術大学卒業のデザイナーから、細胞を用いた研究者、LED 光源の研究製造をする会社など分野は多岐にわたる。社員 10 人ぐらいの規模の会社が多い。

施設は 17㎡～200㎡まで様々なタイプがある。SIC の入居料は 1 坪 1 万円ほどで、そう安くはない。単純な製造業には不向きで、入居企業には付加価値の高い試作や実験を行うものが多い。入居にあたっては審査を行い、イノベーションを起こせる企業、社会的なインパクトのあるものを選んでいる。研究開発型の製造業が多く、開発期間が長く、10 年経たないと売上にならないような企業が多い。

<企業の例>

・こざ企画 : グラフィックデザインの会社。多摩美術大学卒、30 歳ぐらい。従業員 2 人。
・エーセル : バイオの会社で細胞試験を受託。従業員 5 人。
・レボックス : 検査用 LED 高原の開発・製造業。創業 10 年で売上 10 億円、従業員約 40 人。
・青山モータードライブ : モーターなどの開発受託をしている。青学初のベンチャー。
・動物アレルギー検査 : 犬用の食物アレルギー検査。理化学研究所から出たベンチャー。売り上げ 3 億円。
・Super Ox:超伝導線材の研究開発。ロシア人研究者が起業。
・ジャパン・アドバンストケミカルズ : 半導体製造特殊数の開発
・カイゼン・マイスター : “カイゼン”（効率化）のコンサルタント。70 歳代の方によるシニアベンチャー。

▽質疑応答 (質問者は図司准教授)

Q.SIC 立ち上げから 15 年経った手応えはどうか。

A. 全体として 100 億円以上の売上を上げている。市外から SIC に来ている企業も多いので、ある意味企業誘致になっていると思うし、地元に優秀な人材が集まってくるような求心力になっている。シリコンバレーみたいにと言うか、いろんな人が集まってくるというのが大事で、そのことによっていろんなことが起こる。そういう力を秘めた集積をつくろうとしている。

Q. 社長さんたちは圧倒的に理系のようだが、文系の学生の目線ではどのようにこの活動を見ればいいか。

A. テクノロジーはあるが、労務管理、資金管理などの面でマネジメントする人材が不足している企業が多い。デザインや、知財、経理、海外営業など文系の力も必要だ。

Q. 文系の皆さんが就職を考える時に学生に向けたメッセージは？

A. 新しい企業も大企業からのスピンアウト組が多いので、一概に最初から中小企業やベンチャー企業がよいとは言えない。ただ、中小企業やベンチャー企業は、従業員の分母が小さい関係でやりがいはある。自分が活躍できる場所を大事にする人にとってはいいかもしれない。現在は大企業が安定という話でもないので、目的をはっきり持っていれば、選択肢は大手だけではない。また、台湾によく行くが、海外に出ていこうと考えるぐらいのほうがいいのではないか。これからは、大きな市場は海外にある。そこと日本をどう結ぶかというのがキーになってくる。

第 8 回　多摩地域の現在 (2)

# あなたからはじまる、ごみ40%減量 -町田市の現状と課題

ゲスト講師　：塩澤 直崇 氏 ( 町田市環境資源部環境政策課 担当課長 ) 新海 良文 氏（同 政策係担当係長）
授業担当者　：西澤 栄一郎 ( 経済学部教授 )

現在、日本は従来の大量生産・大量消費の社会から、資源の効率的利用とリサイクル推進による循環型社会への転換を図っている。日本のゴミの量は高度経済成長から 1973 年の第 1 次オイルショックまでと、1980 年代後半のバブル期に増加した。これを受けてごみ減量の取り組みが始まり、バブル期以降はごみの量は横ばいとなり、2001 年以降日本全体としては減少に転じた。

町田市では 76 年に資源ごみの分別を開始、82 年にごみ減量資源化を開始し 5 分別を始めた。その後ごみ袋の有料化・資源化にも取り組み、2003 年以降減少している。

「ごみ」には「家庭系」「事業系」があり、一般廃棄物と産業廃棄物に区別されている。一般廃棄物の収集・処理は自治体の責務である。分別方法や収集方法は自治体ごとに決定できる。産業廃棄物については自治体の清掃工場には入ってこない。一般廃棄物に関しては、一般的にごみとして処理する他にも資源ごみとして資源化を図るものもある。町田市は、剪定枝を資源ごみとして回収し、資源化を行う点が他の自治体に比べ特徴的である。

自治体がなぜごみを減量しようと試みているかというと、最終処理場の容量の関係がある。多摩地域においては、2005 年以前はごみの最終処分場は日の出町にある谷戸沢処分場 (現在は閉鎖) と二ツ塚処分場に埋め立てられていた。2003 年当時は、数年で処分場がいっぱいになってしまう状況であり、各自治体が危機感を持ち、ごみの減量の取り組みの推進に乗り出した。ごみの有料化が市長会で合意され、町田市でも 2005 年 10 月から有料化した。2006 年に最終処分場の延命を目的に「エコセメント化施設」を建設し、稼働を開始した。それまで埋め立てていた燃やせるゴミの焼却灰をセメントの原料として資源化できるようになる最終処分場の延命につながった (現在は 50 年利用が可能と言われている)。

町田市は、2011 年、市民の意見も多く採り入れ、「町田市一般廃棄物資源化基本計画」を策定した。全体目標として、2009 年度から 2020 年度までにごみの量を 40％減量するとしている (99,000 トン→ 60,000 トン )。しかし現在、数値はほぼ横ばいで、事業系ごみの増加が減量の障害になっている。1 人 1 日あたりのごみの量で比較すると、町田市は多摩地域の 26 市町の中で 24 位、ワースト 3 に入るごみが出ている。上位の小金井、調布、府中などの自治体との差は資源化率にある。紙の資源化率が低く、容器包装プラスチックについては資源化に着手できていない。新たな資源化施設の建設が急務である。資源化は費用がかかるし、施設建設には住民の反対もあるが、温室効果ガス排出を削減し地球温暖化を防止する観点からは必要だ。

町田市は、ごみ減量の取り組みとして一般廃棄物資源化基本計画を推進するためのアクションプランを策定しており、具体的な減量施策として、▽生ごみの減量、▽雑紙の資源化、▽事業系ごみの減量、▽燃やせないごみの収集後の資源化 (金属類やプラスチック等を選別し資源化する)、▽情報発信を 5 つの柱としている。
取り組みは、市民と事業者が協働して推進していくことが重要だ。大学生の皆さんも、大学内のごみの分別やマイボトル ( 水筒 ) の活用、レジ袋の削減などできる範囲の小さなことからコツコツとやっていくことが重要である。「資源化するからいい」と考えず、ごみそのものを減らすことを考えてほしい。イベントでの不用品の交換会の企画や、宴会で料理を食べ切ること (松本市の「3010 運動」～宴会の冒頭 30 分で料理をできるだけ食べ、最後の 10 分で残っているものを食べ切る～を参考にしてほしい)、さらには、学生や単身者へのごみ減量の必要性の伝え方についても町田市に知恵を貸してほしい。

質疑応答 (質問者は西澤)

Q : 燃やせるごみと燃やせないごみの違いは何か。結局両方燃やすのにどうして二つを分けるのか。

A : 焼却をする前に下処理が必要かどうかの違いがある。燃やせないごみは、燃やす前に、手による選別で金属やプラスチック、硬いものを分けて一次破砕をかける手間が必要。

Q : ごみの戸別収集の理由、メリット・デメリットは何か。

A : 戸別収集は 2005 年の有料化時に、うちの前に出せば済むように楽にして住民の理解を得るために始めた。メリットとしては自宅の前にごみを出せること、ごみ集積場がきれいになったこと、排出者責任が明確になることがある。デメリットは収集にコストがかかることと、時間がかかることである。

第 9 回　多摩地域の現在 (3) 高齢化と周辺化による地域形成の危機

# 高齢化と周辺化による地域形成の危機

授業担当者　：宮城 孝 ( 現代福祉学部教授 )

■高齢化と多摩地域の現状

「高齢化社会」とは全人口に占める 65 歳以上人口の割合（高齢化率）が 7%を超える社会のことで、日本は 1970 年に高齢化社会に入った。また、「高齢社会」とは高齢化率が 14%を超える社会のことで、日本は 1994 年に突入した。今年は戦後のベビーブーム生まれの人たちがすべて 65 歳以上になった。厚生労働省社会保障・人口問題研究所の中位推計によると 2025 年には 30%を超える見込みである。日本の歴史上はもちろん、世界のどこも経験したことのない超高齢化を迎えた。その認識が大事だ。教科書がないから、国民一人一人がどう迎えるか、考えていく必要がある。

今後の大きな特徴は、団塊の世代が多く住む大都市部が急激に超高齢化する点だ。2025 年には団塊の世代が後期高齢者となり、病気、介護、認知症の人が多数地域の中で暮らすことになる。高齢者夫婦世帯や高齢単独世帯が増加し、23 区北東部や西部は増加の割合が大きい。高齢化とともに 15 歳～ 64 歳の生産年齢人口が減少し、2010 年の 2,386 万人から 2030 年には 1,809 万人に減少する（24%減少）と予想されている。

多摩地域の高齢化を見てみると、スポンジ状に進行している。つまり、地域によってでこぼこがある。高度経済成長時代以降、都心の住宅不足に対応するために建てられた集合住宅団地や一戸建ての住宅団地のある地域で一挙に高齢化が進むためだ。

進行する超高齢化の進展に伴う課題としては、若い人たちの都心回帰に伴って子育て世代の減少による地域の活力減退や、生活の不便の発生がある。例えば交通については、病院や買い物が不便になる。町田市相原では、八王子市館ヶ丘の医療センターに行く高齢者が多いが、バス便がないため通院に苦労している。コミュニティバスも不便で赤字となっており、それに代わる相乗りタクシーが運行できないか現在調査をしているところだ。

また、独居高齢者の孤独死や認知症高齢者の問題、また、少子化に伴う子育て不安や虐待の問題、子どもの貧困の増加も進んでいる。高齢者などの社会的弱者への犯罪被害や災害の問題や生活困窮者や引きこもり状態にある若者への自立支援も課題である。

■実践事例：島根県松江市淞北台地区いきいきライフを推進する会（DVD を視聴）

島根県松江市淞北台地区は、1968 年から開発された坂の上にある地区で、一戸建て、県営住宅、県警住宅が集積している。島根県は日本の中でも最も早く高齢化が進行した地域だが、高齢化率は 2006 年の段階で 30%を超え、2015 年には 37% に達している。ここでは、高齢化の対策として 2000 年に自治会内に「高齢者福祉対策検討委員会」を設置し、現在「いきいきライフを推進する会」として活動を行っている。

会は高齢者実態アンケート調査から取り組みを開始し、高台で坂道が多いため引きこもりになる恐れが高いという結果を得たことから、生きがいづくりの活動を始めた。19 種類の同好会活動や病院と連携しての健康講座、日曜朝市などを開催してコミュニティの確保・交流により高齢者の活力につなげている。活動を通じて、坂道・階段で足腰が鍛えられる効果もあり、2010 年では全国区平均より高齢化率が 10 ポイント以上高いのに対し、要介護認定者の割合は 1 ポイント低くなっている。住民、行政や商店、事業者、福祉専門家がネットワークを作りがんばれば、決して暗いだけの社会ではない。超高齢化社会となった地域の一つのモデルと見ることができる。

■実践事例：立川市大山団地

立川市大山団地は都営の団地だ。1300 世帯、3200 人が暮らし、高齢化率 32%だ。佐藤良子自治会長がエネルギッシュに取り組み、1999 年に自治会組織の改革を行った。緊急時の通報への 24 時間対応体制の整備(昼間は自治会事務室、夜間は役員が携帯で対応)や、自治会名簿に要支援者情報を掲載するなど、高齢者の孤立を防ぐ対策を行っている。近所とボランティアの定期訪問による見守りネットワークを構築し、2004 年以降、孤立死がゼロ（2 日以内に発見）の成果を上げている。また、自治会の運動会に 1000 人以上が参加するなど、地域住民のつながりの強さを誇っている。こうした活動の財源は、公園や駐車場の管理からの収益でまかなうコミュニティビジネスを成立させている。高齢化率は高くても住民が相互に支え合える関係を作れるかが重要だ。

■住みよい元気な多摩地域とするために

今後多摩地域をより住みやすい、元気な環境としていくためには以下の 4 点が重要である。▽働き盛り、子育て世代が住みやすいまちづくり

23 区に比べて豊かな自然が活かせる。住宅も都心より安い家賃で提供できる。多摩地域の中に働く場所を確保する。

▽子供から高齢者までの医療・保健・福祉サービスの充実

在宅ケアの充実など。

▽自然環境を活かした安心、安全なまちづくり

防災・防犯、豊かな自然の保全

▽地域住民が主体となったまちづくりの活性化

長く住む住民が責任をもって、将来に向けた地域のあり方を考える。

地域を創っていくのは地域を愛する情熱と他者への思いやりである。

地域の住民たちとの協力とチームワークで、これまで経験したことのない超高齢社会を地域の総合力で立ち向かっていかなくてはいけない。若者の力も期待されている。

第 10 回　（休講）

第 11 回　これからの多摩地域の形成 (1)

# コミュニティ・ビジネス

ゲスト講師　：北池 智一郎 ( 株式会社タウンキッチン )
授業担当者　：図司 直也 ( 多摩地域交流・連携委員，現代福祉学部准教授 )

1976 年生まれ、大学まで大阪で過ごし、2001 年に就職と同時に東京に来た。大手印刷会社を半年でやめて外資系コンサルティング会社に移り、4 年半働いた。経済が下り坂に入り、小泉内閣の下で「官から民へ」「終身雇用から成果主義へ」と転換した頃で、競争とロジカルシンキングを学んだ。その後、自分で経営の一連の流れを経験したくなって独立を目指し、準備としてベンチャー企業に転職してファストフードやコンビニチェーンの経営改善コンサルティングに従事した。
仕事はハードで毎晩帰宅は午前 2 時、夕食はファストフードやコンビニ店だった。自分の取引相手だが、10 円の値下げを競うために従業員は疲弊し、社長すら株主の利益を優先しなければならない。一体だれのためにコンサルティングしているのか、経済合理性を追求するだけでいいのかと違和感を覚えた。物質的な豊かさには恵まれているが、精神的な豊かさが足りないのではないか。本当は白いごはんと味噌汁のほうが豊かではないか、誰かと一緒に食事をとることの充足感のほうが大切ではないのかという思いが浮かび、自分が店をつくる時は両方を叶えたいと考えた。やがて独立し、2010 年に株式会社タウンキッチンをつくった。
それでは、コミュニティビジネスに取り組んだ経緯を話そう。まずホップ、ステップのホップ。発端は「夕方・午後 5 時 40 分のマクドナルドの風景」だった。塾通いの子どもたちが、塾の前に共働きの母親からもらったお金で夕食にハンバーガーを食べていた。これを見て、親に代わって、地域のお母さんたちの力を借りて子どもたちにまともな食事をさせられないかと考え、事業計画書をまとめ、相談して回った。
そこから三鷹市での「学童お弁当配達プロジェクト」が始まった。夏休み中、学童保育に通う子どもたちには給食がない。弁当の準備が難しい共働きの親に代わって、地域のお母さんたちによって運営されているコミュニティカフェ、シニア男性の NPO、父母会が連携し、お弁当を作って配達するという仕組みをつくった。2010 年に 2 校、865 食でスタートし、2011 年は 6 校、2199 食まで広がった。全て口コミの効果だ。初めてタウンキッチンの名前で実施したプロジェクトだったが、地域の中からこれだけのニーズを掘り出すことができた。
ただ、このビジネスモデルは、夏休み中しか需要がないのが難点で、短期集中するためカフェの人たちが疲弊し、経営が難しかった。そこで、1 年を通して、食を通じて地域でコミュニティ的、福祉的機能を果たせるように、自前のキッチンとスペースとなる「学園坂タウンキッチン」をオープンさせた。
ワークショップなどにも取り組んだが、タウンキッチンの問題点が浮かび上がってきた。問題の一つは、商品の品質だ。その日その日で料理を作るお母さんたちの手法は“反マニュアル”的で品質が一定せず、売上が伸びない。また、ボランティアのマネジメントも課題となった。「来る者は拒まず」で希望者を受け入れたところ、勤務状況に難のある人も出た。さらに、そもそも事業が目指すところは何かも問題となった。子どもの食育、主婦の働き方、商店街の活性化…など、周囲からは様々なことを期待されたが、結局、地域のコミュニティを構築し直すことに取り組むことにした。
地域の課題について自分たちで動けるような、地域のハブとなる人材づくりに重点を移した。自ら旗を振れる人、つまり「創業」する人を増やそうとしている。学園坂タウンキッチンはボランティアで運営するのではなく、自らビジネスを興したい人を集めて「食の小商い」をしてもらっている。ベーグル、カフェ、パンなど、日替わりでキッチンをシェアしてトライアルしてもらう。独立採算なので、みな必死でつながりをつくろうと取り組み、農家とコラボしてマルシェを行うといった展開が起こっている。

現代の地域社会は様々な課題を抱えている。突きつめると、「私たちの暮らしはだれがつくっているか」を問うことになる。自分か、国か、それとも会社なのか。
事例をいくつか紹介する。
▽元竹中工務店社員：東北の震災を機に海外へ⇒帰国して日本の英語教育に取り組む。
▽ドイツでパン作りを修業⇒家の軒先でパン屋を開く。一人で週 3 日だけ営業。
▽筑波大の元陸上選手：アスリートのあり方に疑問をもつ⇒子ども向け走り方講座
▽アレルギーの子を持つ母親⇒ビーガン（卵・乳製品なし）のスイーツ作り
▽カメラマン：大手出版社の仕事⇒ふだん着の家族写真の撮影
▽介護離職の経験者⇒介護する側にも事前の備えを、と介護予備校を発想
これら一人一人にストーリーがある。その人にしか見えない景色・課題があり、解決策を模索している。当事者たちが地域社会をつくっていくことが大事なのだ。

第 12 回　多摩地域の現代史 (3)

# くらしを守るたたかい
# ―大型道路とごみ処理施設

ゲスト講師　：木村 真実 氏（弁護士〔日野市民法律事務所〕）
授業担当者　：島本 美保子（社会学部教授）

戦後の多摩地域では、様々な住民・地域運動が展開されてきた。安全保障法で話題になった 60 年前の砂川基地闘争に始まり、国立のマンション建設をめぐる運動、圏央道建設に際する圏央道高尾山天狗裁判、横田基地騒音訴訟などがある。

運動では、安保問題や大型間接税の問題のように「権力」に対して「国民＝多数派」が形成されるケースがある一方、沖縄のような「権力」対「一部の住民（少数派）」となるケースもある。一部の地域の人たちが強く関心を持ち、その地域の外からはエゴと言われるようなケースもある。みんなのために誰か一人が犠牲になるべきなのか。一地域に「痛みを押し付け」ている場合にその痛みをどう理解、共感すべきなのか。「私のくらしが大切」はエゴなのか。みんなが「平等」に「個人として尊重」されるということはどういうことなのか、ということを考えながらこれからの問題を考えてみてほしい。

1. 道路で便利になることと、私の家をつぶされること (1)

一つ目の事例は、日野市、あきる野市にまたがる圏央道建設に際する事案である。2000 年、日野でインターチェンジ（IC）から 2km ほどのところに新たにあきる野 IC を作る案が国によって認可され、400 年以上続いた家を含む多数の家がつぶされることになった。多くの人の、ちょっとした便利さのために個々人の家がつぶされていいのか。これに反対する住民の訴えによって、東京地裁において圏央道の工事を中止する判決が出された。東京高裁を経て、最終的には最高裁で建設認可が決定してしまったが、住民の反対で、裁判によって一旦道路建設が止まった事例のひとつである。

高速道の利用者にはわからないが、IC の下には先祖伝来のくらし、土地があったということだ。

2. 道路で便利になることと、私の家をつぶされること (2)

二つ目は、小平を南北に貫く道路・小平 328 号線についての事案である。これは 40 年前からの計画で、2013 年に認可されて着工されることになった。これを作ることによって確かに便利にはなるが、並行する既存の道路を改良するだけでもよいのではないか、と反対の声が挙がった。40 年前は畑だったところも現在では家だらけで、200 軒をつぶし 450 本の公園の樹木を切らなければならない、道の東西でコミュニティのつながりも分断される、という理由だった。反対運動によって 2013 年に小平市で住民投票が実施されたが、投票率が 35%と低く、投票箱自体開けられなかった。道路の近くに住む人には関心の高い話題であったが、そうでない人にとっては他人事であった結果である。道路の下に家があり、庭がありそこに住んでいる人たちの歴史・人間関係を壊してまで道路を作る価値があるのか考えなくてはならない。

3. 他市のごみはいりません

三つ目は、日野市のごみ焼却場問題である。日野市に焼却炉が 2 つあり、市のごみ自体は 2 つの焼却炉だけで充分対応可能だった。2009 年、市の東端にある焼却場を当時の半分の規模の炉に建て替える計画が出たが、2012 年になって、国分寺市と小金井市のごみについても、それぞれの市が処理場の老朽化と建設困難の問題を抱えることから、日野市でまとめて処理するようにする案が東京都から出された。これによって炉は「大型」案に変わり、焼却場からはより多くの煙が出され、より多くのごみ収集車が日野に入ってくることになるため住民からは強い反対が湧き起った。2015 年 1 月に事務監査請求のために、10,873 名の市民の署名が集められたが、市に損害が出ていないということで、監査請求は通らなかった。

市の北側、西側は冷淡な反応だったが、既にそこにあるからというだけで一地域に押し付けていいのか、どこかが受け入れざるを得ないが偏ってもいいのか、という問題だ。

4. おわりに――少数でも声をあげること

このような問題を考える時、「地域で暮らすこと」をいちばんの基本に据えて考えるべきだ。また、「くらしの言葉で語ること」も大事だ。大きな議論も、生活感覚と結びついて語られなければならないのではないか。「相手の見ている風景も想像すること」も重要だ。

みな忙しく生活しているが、生活環境が壊されたら今の生活はできなくなる。おかしいと思うことには声をあげてほしい。少数意見も反映してこその民主主義だ。「多数決」が原則だが、一方でそこには議論のしくみも含まれており、少数派にも主張の場を与え、多数化のきっかけを与えるべきだ。同時に、少数者の側も声を多数化していくことをあきらめず、声を上げなくてはならない。

Q＆A

島本教授：自分が住む地域で運動の当事者になることは、安保法反対で国会前へデモに行くのとは違う。近所の人と議論しなくてはならないし、署名集めするのも近くの人に姿を見られるのに抵抗を感じるなど、参加することにためらいやしんどさがあると思う。日野市でくらし、弁護士としての人間関係もあるなかで、地元のことをテーマに運動する時、プレッシャーはないか。

木村氏：プレッシャーはあり、全然克服できない。周りの受け止め方について、恥ずかしさや気遣い、しんどさがある。同じ市民として、同じ地域の話として話せればいいのだが葛藤がある。悩みながらやっている。他方で、立場が違う人かなと思った人と共感できることもある。

第 13 回　これからの多摩地域の形成 (2) コミュニティ文化とスポーツ

# 地域スポーツクラブの役割 ―FC 町田ゼルビアの取り組みから

ゲスト講師　：守屋 実 氏 ( 株式会社ゼルビア相談役、NPO 法人アスレチッククラブ町田理事長 )
授業担当者　：三ツ谷 洋子 ( スポーツ健康学部教授 )

FC 町田ゼルビアは 1989 年に設立された町田市にあるサッカーチームだ。今季の成績によって 2016 年、4 年ぶりに J2 復帰を決めた。もともとは、小学生のサッカーチームの FC 町田ジュニアとして 1977 年に設立された。全日本少年サッカー大会優勝、準優勝などの成績を重ねながら、FC 町田ジュニアユース (中学生)、FC 町田日本クラブユース (高校生) とより上の年齢層へ拡大していった末に大人のサッカーチーム、FC 町田を 1989 年に発足させた。ガンバ大阪や横浜 F マリノスといった J リーグのクラブが大人のチームから設立されたのとは異なり、少年サッカーチームから積み上げてきた歴史を持つ、日本でも珍しいクラブである。少年期からプレーしやすい環境があり、町田市出身の J リーガーは市町村レベルでは清水市に次いで 2 番目に多い 40 数人を輩出している。
1992 年ごろ、J リーグのスタートを前にプロチームの誘致を試みた。8 万人の署名を集めたがうまくいかず、自前でチームを作ることにした。町田市の木 (けやき＝ゼルゴバ) と花 (サルビア) にちなんで FC 町田に「ゼルビア」と名付け、J リーグ入りを目指した。
強化にあたっては 4 つの理念・①地域の希望や誇りとなる、②子どもたちに夢を与える、③地域の発展に貢献する、④総合スポーツクラブを創る、を目標に据えたが、要は「子ども」と「郷土」がキーワードだった。組織上も、ゼルビアを支えるために、2003 年に NPO 法人アスレチッククラブ (AC) 町田を設立、さらに 2008 年には株式会社ゼルビアとの 2 本立てとし、現在は (株) ゼルビアで資金集め、AC 町田で選手育成や環境整備に当たっているが、共に地域貢献に取り組んでいる。学校の校庭の芝生化、毎回のホームゲーム後の子どもたちとの「ふれ合いサッカー教室」、シニアや初心者も含めたサッカー教室、スタジアムを各種グループのパフォーマンスの発表の場にしてもらう「Z 劇場」など、様々な団体を巻き込みつつ取り組んでいる。

FC 町田ゼルビアは、現在チームを核にしつつ、地域総合型スポーツクラブを作ることを目指している。地域総合型スポーツクラブができると、地域交流・教育の場が広がり、地域の活性化や生きがいづくりの場になるなど、町田市民の地域への意識の向上、自治体の知名度の向上につながると考えている。
近年、行政も目を向けてくれるようになり、町田市の広報に数多く掲載されるようになったほか、「町田市スポーツ推進計画」を作成し、スポーツでまちづくりをする方針を打ち出した。フットサル、ラグビーの 2 チームと並び、ゼルビアもホームタウンチームの 1 つだ。この構想に実態を追いつかせていきたいと考え、チームを身近に感じてもらうためのホームタウン活動に力を入れている。老人ホームを回ったり、読み聞かせもするし、清掃を市民と共に実施したりもしている。大学との連携も行っている (現在は玉川大学中心)。

地域に愛されるクラブというのは人と人をつなぐ。応援に集まることで人と出会え、年代を超えてつながりができる。新住民の多い地にあって、ゼルビアが勝つと町田市歌をみんなで歌い、町田に誇り・連帯を感じる場となっている。「俺たちのチーム」という思いが、プロチームの経営面で見ても重要だ。プロ野球でも、北海道日本ハム、千葉ロッテ、東北楽天など地域に密着しているチームは、成績にかかわらず成功している。地域に密着することで入場料やグッズ販売を増やし、これまでのクラブチームが頼りがちであったスポンサーに依存する経営から脱却することができる。

最近の取り組みをいくつか紹介したい。「いもづるの会」では、町田市で増えている耕作放棄地で農業体験をしてもらっている。自然や農地の保全の重要性の発信でもある。タッチラグビーのスクールも作り、スクール生 1 人から始め、2016 年には全国大会を開催しようと挑戦中だ。また、ゼルビアキッチンという J クラブ初のレストランも始めた。地域の農業と連携して地産地消の循環サイクルを目指している。さらに、自分の最後の仕事として、女子サッカー普及にも努めている。アメリカ、ドイツに 100 万人を超える女子サッカー人口があることを考えれば、日本が現在 4 万 6000 人どまりなのは少ない。指導者たちを集めてなんとかしたいと話し合っている。
将来はドイツのクラブチームのようなグランドや施設を持つまでになりたい。「ゼルビアを核とした地域総合型スポーツクラブ」を実現させ、町田に豊かなスポーツ文化を育てていくことを目的として活動していく。



第 14 回　これからの多摩地域の形成 (3)

# 八王子市シルバーふらっと相談室館ヶ丘とふらっとカフェの取り組み～モノとサービスを売る仕組みの活用～

ゲスト講師　：今泉 靖徳氏 ( 八王子市シルバーふらっと相談室館ヶ丘室長 )
授業担当者　：平塚 眞樹 ( 社会学部教授 )

八王子市の南西部にある館ヶ丘団地は、人口 3554 人のうち半数にあたる 1765 人が高齢者で、高齢化率は 49.66%と八王子市全体の 24.81% を上回る。また、高齢者世帯 1072 世帯のうち、一人暮らしの割合が 7 割以上だ。郊外団地の高齢化は急速に進んでおり、高齢者に対するケアが必要となっている。

八王子市シルバーふらっと相談室館ヶ丘は、東京都の「高齢者見守り相談窓口設置事業」として、高齢者の在宅生活の安心・安全を提供するために、地域の実態把握をして課題をつかみ、高齢者見守りの体制をつくり、高齢者本人や家族からの相談受付にあたる。相談室は都内で 55 カ所、八王子市には 2 カ所設けられている。

平成 23 (2011) 年、相談室が館ヶ丘に開設された当初は、団地内の高齢者の方の認知度は低く商業施設と勘違いしている高齢者もいた。商店街には人影がなく、車に落書きがあるなど殺風景な景色で、この空気を変える必要があると感じた。地域の課題の多さだけでなく”深さ“に対し、顧客の目線に立って顧客のニーズに寄り添うマーケティングの発想に立つことにした。まず、相談室について、外の環境 (住民の数値的データ、自治会など地域組織の脆弱さ)、中の状況 (相談室の人員や設備、力量)、ポジション (住民に認知されていない、行政に不信感がある) を整理した。相談室の常勤職員は 1 名しかおらず、団地の高齢者に関する情報を集めることも困難だった。

この年の夏、東京都で高齢者を熱中症から守る緊急対策事業を行うことになった。マンパワーと情報が不足するなかどう対応していくか考え、大学の学生たちに協力依頼することにした。当初、学生たちは高齢者に対する知識やボランティアのノウハウもなく、活動が軌道に乗るか不安があったが、高齢者の戸別訪問や給水所運営を展開して、結果として 500 人を超す高齢者からアンケートの回答を得ることができ、相談室の貴重な財産となった。学生ボランティアに元気をもらったといった声が高齢者たちからもあがり、相談室の認知度も向上できた。

アンケートの回答から、マーケティングの手法で、住民の類型的な人物像(ペルソナ) をいくつか抽出した。例えば、「80 代男性、一人暮らし、要介護度〇…」のように人物像を描くとイメージが湧き、どのような手を打てばよいかが見えてくる。人のつながりづくりができ、丁寧に淹れたコーヒーで飲む人に喜びをもたらせるカフェをつくることにした。
ふらっと相談室に併設するふらっとカフェは、スタッフと 6 カ月交代で参加する学生と住民のボランティア 20 ～ 30 人によって運営されている。カフェがあることで相談室での相談もしやすくなり、カフェを起点に趣味のサークル活動も始まった。サークルがあることでコミュニティに入りやすくなる。ボランティアとの交流もあり、高齢者の孤立を防止でき、安否などの情報確認が容易になるといった相乗効果が生み出されている。現在、ふらっとカフェには月に約 1000 人のお客さんが訪れ、通算来客数は 5 万人になる。館ヶ丘になくてはならないものになっている。

学生ボランティアとして、法政大学からサークル「たまぼら」のメンバーが来てくれている。一昨年あたりまでは学生たちの活動は個別ばらばらだったが、昨年は学生たちがチームとなって、学生発案での活動が増えた。週末に学生主催で「休日ふらっとカフェ」を実施したり、不要になった本を集めて古本市を開催したりもした。昨年 10 月のハロウィンパーティは、一昨年まで商店街主催で行われていたものを学生主催に変えた。多くの子どもたちや学生が仮装して楽しそうにはしゃぐのを見て、「まるで団地に魔法がかかったようだ」と嬉しそうに言った高齢者もいた。

学生ボランティアのよさは”よそ者度”が高いことだ。住民が劣等感を持たずに、気軽にものを頼める。学生が来始

めた当初は、住民は警戒して遠目に眺めていたが、学生が汗をかいてがんばる姿を見て、だんだんと見守る姿勢に変化してきた。また、学生の活動が地域のいろいろな活動に火を付けた面もある。夏の熱中症予防の活動時には、お母さんたちがボランティアのためにおむすびを作る「おむすび計画」が始まった。お米の寄付も集まった。高齢者の方から「コサージュを作れます」と申し出があり、地域の小中学生の卒業式の時に子どもたちにコサージュを贈り、卒業式にも招かれるようになった。

地域の弱みや課題は、発想を転換すれば地域の特長・強みになる。高齢ということは、経験や技能が豊富ということだし、年代が偏っているということは支援の的が絞りやすいということだ。地域組織が弱ければ、しがらみがなく動きやすい。高齢者が住みやすい環境をつくるには、制度的な施策だけでなく、土壌となる地域のコミュニティが必要だ。数値的なデータで見ると、相談室ができた当時よりも高齢者率は上昇し、孤独死もデータを把握できるようになった平成 26 年 2 月以降で 13 件起こっている。状況は悪化しているように見えるが、皮膚感覚では、この 5 年でつながりが増え、笑顔が増え、地域は明るくなったと感じる。みなさんも、何か感じたことがあればぜひ現場に行って、実際に動いてみてほしい。現場で動いて得た経験は大きな財産になる。



第 15 回　まとめと今後に向けて…グリーンヒル寺田での動きを題材に

# ふりかえりのワークショップ

授業担当者　：図司 直也 ( 現代福祉学部准教授 )
本野 直子 ( 多摩地域交流センターコーディネーター )

■授業のねらい：図司

これまでの授業で、多摩地域の問題・課題をいろいろと取り上げてきた。グリーンヒル寺田では、法政大学、八王子市、UR（都市機構）で、地域の課題解決に向けて互いにできるところを分担してやっていこうという話を進めている。地域の課題解決の取り組みが実践の段階に入りつつあり、関わってくれる学生のみなさんも出始めている。今回、どんな形で現場に入っているかを紹介し、みなさんにもどういうことができそうかアイディアを出してもらいたい。

■グリーンヒル寺田での学生の活動：「@団地プロジェクト」所属の学生たち

▽現代福祉学部 3 年　大野貴文

活動のきっかけは、2014 年の 4 ～ 6 月に大学で行われた団地再生のワークショップだ。いろいろな人が参加して、団地の現状や将来を話し合った。ここで、その後の活動の起源となる「持ち寄り居酒屋」というキーワードも出てきた。団地が抱える課題としては、▽少子高齢化、▽空室・空き店舗の増加、▽コミュニティの衰退、が挙がった。そこで、目をつけたのがグリーンヒル寺田にある空き店舗で、持ち寄りイベントの実施を目指した。空き店舗には何もなかったので、「不用品をください」と団地の中を歩き回り、こたつやソファを提供してもらった。二つの空き店舗で、こどもの遊び場とお茶の間の 2 つの空間をつくり、多世代の交流を図った。当日は 0 歳から 90 歳を超える人まで約 250 人が来てくれた。この模様は読売新聞、東京新聞でも取り上げられ、参加しなかった方も含めて住民の方々が学生に関心を持ってくれた。

この後もイベントを続けている。七夕の流しソーメンは大盛況で 350 人が来てくれた。地域からの依頼で地元の市民センターの祭りに出て綿菓子を売ったり、もちつき大会もやった。イベント実施で企画力も付いたし、運営のマネジメント力もついた。地域の中に入って、地域の問題と向き合いながら、リアルな場で学べるのが最大の魅力だ。やってみたいという人がいたら、イベント当日だけでも歓迎するのでいっしょにやりましょう。

▽社会学部 1 年　小野美瑞季

自分が住んでいるまちが「消滅可能性都市」と判定された。将来、活性化に取り組みたいと思い、「@団地プロジェクト」に入った。

コミュニティデザインとか地域活性化のことを考える時、資源になるのはそこにある特有のモノや人だ。グリーンヒル寺田には空き店舗があり、自分たちの目的や住民の要望によって使いたいやり方で使える。そこがこの活動の面白さだ。地域の活性化のためには、人とのつながりがとても大切だ。初めは表面的なあいさつだけだったが、今は笑顔を見せたり自分の話をしてくれるようになってきた。住民の方たちが学生を支えてくれているが、支えられるだけでなく、対等な関係で寺田の活性化につながるといいと考えている。

▽社会学部 1 年　神澤詩織

地域交流センターで「これから@団地の活動が大きく面白くなっていく」と聞き、メンバーに加わった。私たちが寺田で企画を実施すると、学生がやってくれるからと言って来てくれる人がいたり、何かと協力してくれる人がいる。学生の影響力の大きさを感じる。寺田の活動はこれから新しいステージに入る。もっとグリーンヒル寺田のことやまちづくりの手法について知り、学生も地域の人も、みんなが参加しやすい空間をつくりたい。

■今後のグリーンヒル寺田での展開について：本野

2016 年から、グリーンヒル寺田での取り組みが新しい局面に入る。学生たちのイベントがきっかけとなって、UR が、

大学が地域の人と一緒に活用してくれるなら、空き店舗をコミュニティスペースとして提供してもよいという話になった。3 年間ぐらいかけて地域の活性化を進めていく次のようなステップの青写真を描いている。

▽空間を改修し、多世代交流の場、居場所をつくる。
▽創業支援をするなど、長期的に地域を支えるしくみをつくる。
▽ 3 年間ほど大学が引っ張り、地域の NPO などに場の運営をバトンタッチしていく。

大学がきっかけを作るが、地域からキーパーソンや参画してくれる人を募り、あくまで地域の中でコミュニティスペースとして運営していくプランだ。

他の団地での活性化の事例についても勉強している。取手と国立の例を紹介したい。

【事例 1】取手アートプロジェクト（茨城・UR 取手井野団地）
この活動の拠点は「いこいーの」というスペースだ。ボランティアの人がいてお茶も飲める。ここではアートをコミュニティ再生に活かしている。

例えば、「とくいの銀行」というプログラムがある。まず、自分が特技だと思うことを登録してもらう。この写真には「魔法づくり」とか「悩みを聞きます」とか書いてある。これを見た人が選んで、いっしょにやってほしいとオーダーすると、登録した人に連絡が行きやってもらえる。コミュニケーションを生み出す仕掛け（アート）で、人と人の関係性がつくり出される。

【事例 2】くにたち富士見台人間環境キーステーション(東京・UR 国立富士見台団地)

「大学と地域を結ぶまちづくり、まちが学生を育てる、学生がまちを変える」をキャッチフレーズにして、14 年ぐらい続いている。団地の空き店舗が 4、5 軒あったのを改修した。一つ目は「カフェここたの」になった。カフェとしても営業するが、スペースの時間貸しもする。演奏会なども実施する。運営は学生と住民の有償ボランティアがあたっている。二つ目は「とれたの」という野菜を売る店だ。地産地消を実現している。三つ目は「まちかどホール」だ。大学の先生たちも講師になったりしてセミナーを開いたり、ワークショップをしたりしている。

活動を継続させて現在は黒字経営となっている。この活動がなかったら、団地が衰退していたのは明らかで学生が入るとすごいパワーになるという例だ。

■グループワーク（約 15 分）
〔テーマ〕グリーンヒル寺田で、学生の力を活かして、地域をつなぎ、元気にする活動を企画する。
〔出てきたアイディア〕
▽高齢者の運動教室：スポーツ健康学部の先生やトレーナーを目指して学んでいる学生が講義。
▽子どもたちと季節を楽しもう：季節の料理や行事を楽しむ。
▽今までなかったお店やショッピングセンターを作る。
▽犬や猫を飼う
▽ヒルシネマズ：懐かしの映画を上映したり、リクエストを受けたりする。映画の持ち込みも OK。
▽絵でつな画廊（つながろう）：お絵かき教室をやり、貼って展示する。
▽まご制度：地区ごとに学生が 1 人ずつ孫契約を結び交流する。
▽イルミネーション企画：プロジェクションマッピングで学生が帰りに寄りたくなる場を作る。
▽バリアフリープロジェクト：坂が多いので、学生が板などでバリアフリー環境をつくる。
▽学生と一緒にサッカーをしよう
▽団地カフェ
▽韓国料理を日本へ：留学生のアイディア
▽さあ来る誘致（サークル誘致）：サークルを呼んで発表できる場所を作る。
▽お祭り：団地全体でお祭りをする。
▽野菜でつながる：みんなでいっしょに畑をやる。
▽駄菓子屋プロジェクト

■まとめ：図司

たくさんのアイディアを出してもらった。以上見てきたような動きは「ソーシャルイノベーション」につながる動きだ。地域での活動として、見えやすいところではボランティア活動がなされている。困っている人のところに手助けに行く活動であり、継続していくことは大事だ。ただ、地域の課題は、ボランティア活動だけでは解決できないというのも事実だ。課題を乗り越えるための取り組み、状況を共有して知恵を集める行為が必要だし、乗り越えるための原動力も必要だ。ボランティアでは為し得ないものについて、ここまでの授業で話してきた。それがつまりソーシャルイノベーションというもので、革新性が必要だ。

これからみなさんが社会に出るころには、これが社会で当たり前に必要とされる時代となっているだろう。ぜひそういうところに注目し、アプローチしていってほしい。今日の企画もそのきっかけにしてほしい。

# @団地　法政大学×地域 活性化プロジェクト

本プロジェクトは、多摩地域交流センターの大型プロジェクトとして、現代福祉学部保井美樹教授をリーダーに迎え、2014 年にスタートしました。『@団地 法政大学×地域 コミュニティ再生の連続ワークショップ (2014 年 5 月～ 7 月、4 回実施 )』の開催を経て、“八王子市 グリーンヒル寺田”の“空き店舗”を中心に活動を展開すると定め、学生プロジェクト ( 以下、@団地 ) が結成されました。

グリーンヒル寺田は 35 年前に建てられた UR 団地で、高齢化率 41％、空き家の増加 ( 賃貸棟 )、商店街の衰退による空き店舗化、そして賃貸棟と分譲の交流分断等が課題としてあがっています。

2014 年 11 月には、大学と地域の出会いの場として、また団地の課題解決のきっかけとしての交流のイベント『第 1 回おいでよ ! アッとほーむ～持ち寄り晩ごはん』を開催しました。当日は、関係者の予想を上回る 250 名が参加し、主催の法政大学のみならず、住民及び支援組織にも大きなインパクトをもたらしました。以降、自治会、活性化の会、民生委員、老人会、地域包括センター ( 八王子市あんしん相談センター寺田 )、UR 都市機構、そして、すでに同地域で活動をしていた学生プロジェクトで、毎月の居場所づくりを継続していた『法政大学カフェ部』、団地活性化の動きを仕掛けた『@団地』、さらに保井ゼミナールが連携し、12 月、2015 年 3 月と同イベントを継続して開催し、地域との関係性を深めてきました。

そして、この学生による活発な地域交流イベントの成果を受け、2015 年 3 月、八王子市、UR それぞれから、法政大学と協定を結び、これまでの活動を互いに支援する体制を確立したいという申し出がありました。

2015 年度は、三者による協定締結に関する動きと、学生による地域活動の両輪で展開していくことになります。

## 2015 年度の寺田での活動

**▽法政大学では、「@団地」「法政大学カフェ部」「保井ゼミナール」が年間を通して活動を展開し、団地の多世代交流を生み出しました。**

| | |
|---|---|
| 5 月 3 日 ( 日 )13 ～ 17 時 | カフェ部『寺田ティータイム』開催 --- オープンカフェとして広場で実施。新たな来場者が増えた。 |
| 15 日 ( 金 )16 ～ 20 時 | 保井ゼミ『第 4 回おいでよ ! アッとほーむ～交流会＆歓迎会』開催 --- カフェ部も参加。子どもの遊び場からスタートし、夜は持ち寄り晩ごはん。 住民と新 1 年生 ( 保井ゼミ＆@団地 ) の交流の場となった。 |
| 6 月 14 日 ( 日 )13 ～ 17 時 | カフェ部『寺田ティータイム』開催 |
| 7 月 12 日 ( 日 )13 ～ 17 時 | @団地『第 5 回おいでよ ! アッとほーむ～七夕祭り＆流しそうめん』開催 --- 来場者 300 名。カフェ部、たまぼら佐野川プロジェクトとコラボレーション。空き店舗ライブには寺田地域から「活性化の会」「クリニックゼロ」、法政学生サークル「落語研究会」国立市から「街劇団えんがわカンパニー」ゲストとして歌う人類学者・佐藤壮広氏など多数出演。 |
| 17 日 ( 金 )16 ～ 18 時 半 | 保井ゼミ『オープンゼミ “寺田歴史物語”』開催 --- 講師は八王子市市史編さん室の佐藤広氏。学生と住民が約 35 名参加。 |
| 8 月 22.23 日 ( 土 . 日 ) | 地域行事“寺田夏祭り”カフェ部オープンカフェ開催、@団地は地域の手伝い --- 来場者 500 名。グリーンヒル寺田が最も賑わう恒例行事。自治会、第 1 ～ 5 管理組合、学童、幼稚園、保育園が協力して開催。 |
| 9 月 13 日 ( 日 )13 ～ 17 時 | カフェ部『寺田ティータイム』開催 --- 地域情報誌よみっこに活動の様子を取材された。 |
| 24 日 ( 木 )17 時半～ 20 時 | @団地『第 6 回おいでよ ! アッとほーむ～持ち寄り晩ごはん』開催 --- カフェ部も参加。住民なじみの方 15 名参加。広報に課題が残る。 |
| 10 月 11 日 ( 日 )13 ～ 17 時 | カフェ部『寺田ティータイム』開催 --- 法政大学カメラ部とコラボレーション。1 日限定の展覧会を同時に開催。 |
| 17 日 ( 土 ) | “寺田横山市民祭り”@団地出店、寺田町会から誘いを受け、学生ブースで参加。--- 綿菓子を販売し子どもに好評。団地以外のネットワークが広がる。 |
| 23 日 ( 金 )15 ～ 18 時 半 | 保井ゼミ『オープンゼミ “寺田まち歴史探検”』開催 --- 住民参加者 15 名＋学生で、榛名神社～六地蔵～板碑～グリーンヒル寺田をまち歩きしながら歴史を感じる。大好評。 |
| 11 月 8 日 ( 日 )13 ～ 17 時 | カフェ部『寺田ティータイム』開催 ー メニューにホットケーキを追加。100 円で提供し、好評。 |
| 12 月 6 日 ( 日 )10 ～ 16 時 | @団地×グリーンヒル寺田活性化の会『冬祭り』--- カフェ部も参加し、賃貸棟の餅つきとビンゴ大会を開催。 |
| 20 日 ( 日 )13 ～ 17 時 | カフェ部『寺田ティータイム』開催 --- クリスマス会開催、プレゼント交換などで盛り上がった。地域側が高齢化しているため、学生のつき手は歓迎された。 |
| 1 月 17 日 ( 日 ) 13 ～ 17 時 | カフェ部『寺田ティータイム』開催 |
| 31 日 ( 日 )12 時半～ 18 時 | @団地『いこうよ ! アッとステージ新年会』開催 --- カフェ部、薫寿会と協働し、学生と住民でカラオケ大会を行う。新たなコミュニケーションのチャンネルとなった。マジックショーも好評。 |
| 2 月 14 日 ( 日 )13 ～ 17 時 | カフェ部『寺田ティータイム』開催 --- バレンタイン企画を実施。 |
| 3 月 13 日 ( 日 )13 ～ 17 時 | カフェ部『寺田ティータイム』開催 ---3 年間活動を続けた卒業生を、学生・住民で送る会を実施。学生 - 住民ではなく、それぞれが個人同士の関係を育んできたことが感じられた。 |

▽このプロジェクトはフォーラムや講座で、広く取り上げられました。

●八王子フィーチャーセッション ---5/24( 日 )「今、Danchi が面白い」プレゼンとグループワーク
●さがまちコンソーシアム --- 第 3 回目を寺田空き店舗で開催。
●八王子市民塾 --- 団地の事例として紹介。学生と塾生とのワークショップ
●多摩地域形成論、第 14 回目 --- 団地の事例プレゼンのあと、空き店舗での交流イベントを企画。
●八王子コンソーシアム、学生チャレンジ企画 --- 保井ゼミとして採択。ニューズレターの発行。
●地域交流 DAY--- @団地・カフェ部が発表。寺田関係者も 10 名強出席。

## 三者協定締結について

▽ 2014 年の年度末から協定締結に向けての動きが始まりました。締結に至るまで、約 1 年間の期間を要した背景には、三者間の調整、担当部局、それぞれの人事異動、八王子市の所管決定までの担当部署の移動 ( まちなみ整備部住宅政策課⇒市民活動推進部協働推進課⇒福祉部高齢者福祉課 )、そして協定の条件・覚書の合意等の調整などが挙げられます。

▽ 2016 年 3 月 1 日　グリーンヒル寺田団地における連携・協力に関する協定書が、八王子市　市長－法政大学　総長－独立行政法人都市再生機構　東日本賃貸住宅本部　本部長　名において締結されました。

▽協定締結を受け、UR が空き店舗の基礎改修工事 ( 扉・水道光熱設備・トイレ・キッチン ) に入る予定です。(2016 年 6 月中旬竣工予定 )

## 2015 年度の活動を経て

今年度の大きな成果は、UR 負担での団地活性化の活動拠点として、空き店舗の基礎改修工事の確約と、法政大学による多世代交流イベントの定着です。@団地、カフェ部、保井ゼミナールそれぞれが、積極的に空き店舗を活用し、多世代交流イベントを毎月 2 回程度開催したことにより、法政大学生が団地内で活動していることが広く伝わり、学生の存在を好意的に受け止め、機会があれば連携する地域の輪が確実に広がっています。さらに、この 3 つのプロジェクトの仕掛け・ターゲットが異なっていることも、参加者の幅を広げることにつながっています。また、学生による空き店舗の活用・再生を念頭に活動している@団地が、自治会や地域の有志団体・活性化の会と連携するため、地元のミーティングにも積極的に参加したことで、信頼関係が深まりました。

◁△保井ゼミナール作成のニューズレター

八王子コンソーシアム「学生企画事業補助金」事業

▽@団地「流しそうめん新聞」＋もちより晩ごはん第６弾

▷地域情報誌「よみっこ」掲載
保井ゼミナール「寺田まち探検」

◁△地域情報誌「よみっこ」掲載
法政大学「カフェ部」

# たままち日和

## ～学生×地域　つながる未来～

**2015年度**

学生中心で大学体験イベントとワークショップを実施
地域から約70人の方々が参加

多摩キャンパスの紅葉の色が深みを増す2015年11月12日、多摩地域交流センターと学生でつくる『たままち日和』実行委員会が、地域の方々との交流イベント『たままち日和　～学生×地域　つながる未来～』を開催しました。
これ以前にも、学外の方々を招いて、学生が年間の活動をプレゼンテーションする『地域交流DAY』や、大学内の施設の見学を中心とした『大人のオープンキャンパス』を実施してきましたが、この催しは、センター登録団体のメンバー有志が初めて実行委員会をつくって、「地域活動」を中心テーマに、学生と大人が対等の立場で意見や想いを交換する機会をつくろうと企画しました。

内容は2部構成で、第1部は、地域の方々に学生生活の一部を体験していただく「ワクワクキャンパス交流体験」、第2部は、地域の課題について全員参加で語り合うワークショップ「明日を変える！タマトーク」。
当日は、学生の活動地域の方々や自治体関係者、地域包括支援センターや市民活動の中間支援組織、他大学のボランティアセンターの方々など、約70人の方々にご参加いただきました。対する学生側は約30人で、全体で100人近い盛況となりました。

企画にあたって掲げた目標は、▽各登録団体とその活動地域を横につなぐ、▽地域の方々から学生の活動に対して評価・フィードバックをもらう、▽年代や立場の違いを超えて互いの考えを知り合う、の3つでした。6月から話し合いを重ね、詳細な内容や出演者を固めていき、10月になると、多くの学生にとって初挑戦となるワークショップの試行を重ねて本番を迎えました。

■第 1 部「ワクワクキャンパス交流体験」

平日の 13 時の開会にもかかわらず 40 名以上の方が冒頭から集まってくださいました。半数は、館ヶ丘団地で活動するサークル「たまぼら」がこの日のイベントに合わせて企画した「法政大学ハイキングツアー」で来訪してくださった館ヶ丘住民の方々で、その動員力が注目を集めました。

経済学部 2 年の池田隆平さんの進行で、多摩地域交流センター長の図司直也・現代福祉学部准教授が開会のあいさつをし、「地域と大学の連携は、大学によっては教員の研究が前面に出るなどいろいろな形があるなかで、本学の場合、学生による自主的な活動がいくつも展開している」と特徴を紹介。続いて“よさこい”サークル「鳳遥恋」がエネルギッシュな歓迎パフォーマンスを披露すると、一気に会場の雰囲気がほぐれました。

続いての「特別授業」には、都市計画やまちづくりが専門の保井美樹・現代福祉学部教授が登場。「まちを育むエリアマネジメント――地域で決める、動く、変えていく――」のテーマで講義を行いました。少子高齢社会では、地域の住民自ら「（経済）成長しない、でも、幸せな生活」のための戦略を考えていく必要がある、行政や企業が主導するのではなく住民参加の地域再生を、と説いて、具体的に島根県海士町などでの取り組みを写真も示しながら紹介すると、受講者全員がぐっと前のめりになってスクリーンに見入っていました。

この後、図書館など大学内の主要な施設を学生の案内で巡る「キャンパスツアー」を実施して第 1 部は終了しました。

■第 2 部「明日を変える！タマトーク」

第 2 部のワークショップの参加者は、地域の方 41 人、学生が 25 人で計 66 人。ワークショップとしてはかなり大規模なものとなり、10 のテーブルが会場にぎっしりと並びました。

第 2 部の目標として設定したのは、▽学生と地域の大人とで“本音で”話し合う、▽よその地域が何をやっているか知る、▽似た悩みや課題について、思いや対応策を共有する、の 3 つ。進行役（ファシリテーター）はすべて学生が担当しました。全体進行（メインファシリテーター）は社会学部 3 年の森岡藍さんが務め、各テーブルの舵取り役も、1 年生を含む学生たちが当たりました。実施前にはリハーサルを繰り返し、▽地域や立場が違っても、だれでも答えやすくするためにはどんな質問を投げかければよいか？　▽各人が挙げた課題から全員で話し合うトピックを絞り込む場合、どんな視点で共通項を整理すればよいか？　といった点を特に練習して当日に臨みました。

テーブルごとに自己紹介をし、本題に入りました。ステップ 1 は「自分が活動している（住んでいる）地域の好きなところ・自慢」で、それぞれの地域の独特のモノや場所、人が浮かび上がり、その人が地域に対して持つ愛着も伝わってきました。
ステップ 2 は一転して「地域の“残念”なところ・課題」。付箋紙に書いて発表し合った後、似かよった課題から、複数地域に共通する課題を探り出し、各テーブルのメイントピックに定めました。
◇各テーブルのメイントピック
① 少子高齢化の地域をどのようにしたら盛り上げられるか。
② 地域と大学の連携
③ 地域活動のマンネリ
④ 若者の地域参加
⑤ 色んな世代がつながるためには
⑥ 活動の高齢化
⑦ 人とのつながり
⑧ 活動の価値観
⑨ 人材の開発・育成
⑩ 地域力

ステップ 3 は、メイントピックとした課題を解決するためにどんな対策がとれるかで、互いの地域の経験などを出し合い、方向性をまとめ上げました。
最後は共有の時間で、各テーブルで話し合われた内容が全体に向けて発表されました。参加者の顔は大人も学生もみな上気して、地域や世代を超えて互いに耳を傾け、語り合った満足感がうかがえました。

■「大学が地域、人をつなぐのも、ありだ」

終了後の参加者アンケートでは、回答者 44 名のうち 41 名から「参加してよかった」の評価をいただきました。理由として、「いろんな人と交流できた」「地域づくり、人づくりに興味のある方々との情報交換ができた」といった声が挙がりました。

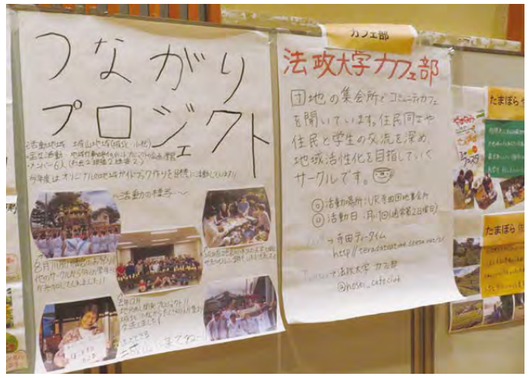
「大学が中心となって地域、人をつなぐのもありだと思った」「普段出会うことがない人たちと、ざっくばらんな話ができ勉強になった」という声もあり、若い学生たちが“つなぎ目”の中心となって大学がハブ機能を発揮したことに価値を認めていただけたと感じました。

また、特に第 2 部のワークショップが印象を残った様子で、「学生ファシリテーターがしっかり準備している印象があった」と学生の進行ぶりに評価をいただいたほか、「地域の方とここまで話し込める機会はなかなかない。自分自身、活動にブランクがあったがやる気が出た」という声もありました。

一方で、メニュー（設問）に沿って話し合いが進む点に不自由さを感じた方もおられたようで、「一人一人の話したいことがもっと聞きたかった」というご意見もありました。学生たちの多くは大人との議論の舵取りに苦労し、地域での経験不足もあいまって力不足を感じたと言いつつも、経験できたこと自体を大きな収穫として受け止めていました。

以上、『たままち日和』の開催で得られた成果には大きいものがありました。なにより、学生たちと地域の大人たちとで、地域づくりという共通の課題について語り合ったりつながったりできる関心のネットワークを形成できることを確信できました。これを出発点に、次は、さらに掘り下げたテーマでの対話や情報共有、具体的な連携を生み出せるような場づくりに進めるのではないかという確かな手応えが残りました。

■データ：準備から本番までの行程
5 月　…センター学生スタッフと一部の学生から、地域の方との交流会の提案
　⇒各団体に参加の呼びかけ
6 月 8 日　…第 1 回実行委員会を開催。これ以降、毎週月・水曜にミーティングを開催
7 月 20 日…コンセプト、イベント名、開催日、構成を決定。予告チラシを作成
9 月 3 日　…学生スタッフを中心に、秋学期の準備の進行スケジュールを検討
9 月 29 日　…秋学期開始、実行委員会再開。第 1 部班、第 2 部班、広報班の 3 チームに分かれて詳細を企画・手配
10 月 1、6 日…ワークショップ体験会。第 2 部のワークショップの構成を検討
10 月 27 日　…ワークショップ部分のリハーサル、プログラムの印刷発注
11 月 2 日　…第 1 部リハーサル
11 月 5 日　…第 2 部リハーサル
11 月 10 日　…全体リハーサル、運営マニュアル完成
11 月 12 日　…『たままち日和』本番
11 月 17 日　…反省会


つながりプロジェクト
法政大学カフェ部

# MUSEUM PRJ

## Tama Campus × Local

法政大学 多摩キャンパス 地域まるごとミュージアム

2015年度

**法政大学多摩キャンパス・地域まるごとミュージアム**
**設立準備プロジェクトの活動報告**

法政大学多摩キャンパス・地域まるごとミュージアム ( 仮称 )
設立準備プロジェクトリーダー
馬場 憲一 ( 現代福祉学部　教授 )

多摩地域交流センターのプロジェクトとして発足した本プロジェクトの概要、活動計画、具体的な活動内容などについて述べ、2015 年度における本プロジェクトの活動報告とする。

## 1. 本プロジェクトの概要

本プロジェクトの概要は以下の通りである。

**(1) プロジェクト名**

「法政大学多摩キャンパス・地域まるごとミュージアム」設立準備プロジェクト
( 注・・・対外的には「武相地域まるごとミュージアム」という名称で活動 )

**(2) プロジェクトの目的・趣旨**

2014 年 9 月 20 日付けで法政大学多摩地域交流センター長あてに提出した基本構想報告書に基づき「法政大学多摩キャンパス・地域まるごとミュージアム」設立に向けての準備を行うことを目的とする。

**(3) 構成メンバー**

馬場憲一（現代福祉学部教授）をプロジェクトリーダーとし、本学の教職員、学生、卒業生、研究者、行政、企業、NPO、各種団体、地域住民などに参加を促し実施する。

**(4)2014 年度までの経過と活動内容**

・2014 年 1 月、法政大学多摩地域交流センター長から 2014 年度「法政大学多摩キャンパス･地域まるごとミュージアム構想研究会」立ち上げに向けた事前調査の依頼を受け、法政大学現代福祉学部兼任講師須田英一氏とともに大阪市立大学西成情報アーカイブ、立命館大学国際平和ミュージアム、京都文教大学総合社会学部、同志社大学ハリス理化学館同志社ギャラリー･同志社大学歴史資料館（分館）、佛教大学宗教文化ミュージアム、龍谷大学龍谷ミュージアム、島根大学ミュージアムなどの調査を実施し、同年 3 月に報告書を提出する。
・2014 年 4 月法政大学多摩地域交流センター長から委嘱をうけた馬場憲一（現代福祉学部教授）がプロジェクトリーダーとなって、「法政大学多摩キャンパス・地域まるごとミュージアム基本構想」研究会を立ち上げ、本学の教職員、学生、卒業生、研究者、行政、企業、NPO、各種団体、地域住民などに参加を促し、ワークショップ形式の研究会 ( 延べ約 150 名参加 ) を 3 回開催し「『法政大学多摩キャンパス・地域まるごとミュージアム ( 仮称 ) 基本構想』とその設置の可能性について」と題した報告書を作成し、2014 年 9 月 20 日付けで多摩地域交流センター長あてに提出する。

## 2. 2015 年度の活動計画

2015 年 4 月に作成した 2015 度における本プロジェクトの活動計画は以下の通りであり、本プロジェクトはこの計画に沿って進めることにした。

本プロジェクトは 2014 年 4 月多摩地域交流センター長からの依頼をうけ、多くの地域住民・研究者・行政関係者、教職員、学生などが参加して研究会を開催し、「『法政大学多摩キャンパス・地域まるごとミュージアム ( 仮称 ) 基本構想』とその設置の可能性について」と題した報告書を作成し、2015 年度からはその実現に向けて武相学研究会の開催やワークショップ形式のモデル事業を行ってきた。しかし、多摩地域交流センターの今後の活動のあり方を検討する中で本プロジェクトについてもその見直しが図られ、2015 年度末をもって終了することになった。

「法政大学多摩キャンパス・地域まるごとミュージアム ( 仮称 ) 基本構想」の実現に向けて多くの地域住民・研究者・行政関係者・教職員・学生などが参加して検討してきた本プロジェクトであったが、その実現を見ずに終了することになり、プロジェクトの責任者として本プロジェクトに参加していただいた多くの方々に深くお詫びを申し上げるとともに、これまで本プロジェクトにいただいたご支援とご協力に対し厚く謝意を表する次第である。

また、私は今後、一個人として本構想の実現に向けて地域に働きかけていきたいと思っているので、志ある方々のご支援とご協力を切に希望している。

以上

## 3. 2015 年度の活動

2015 年度の本プロジェクトの活動は、2014 年 9 月に多摩地域交流センター長に提出した「『法政大学多摩キャンパス・地域まるごとミュージアム ( 仮称 ) 基本構想』とその設置の可能性について」と題した報告書にもとづいて 2015 年 4 月から始めることが前年度の地域交流センター長ならびに事務局担当者との協議の中で了承を得ていたので、年度当初から活動計画に沿って本格的にスタートさせる予定であった。しかし、地域交流センターの事務局体制や運営委員会メンバーが新しくなったこともあり、本プロジェクトの活動が正式に認められたのは 7 月下旬であった。そのため 2015 年度の活動については「武相地域まるごとミュージアム」実現に向けた「協議体」の設置準備、外部資金の獲得などに十分時間を割くことができなかったが、そのような中で、以下の活動を行い、地域交流センター事務局の全面的な支援を得て実施することができ一定の成果を上げることができた。

**(1)「武相学研究会」の開催**

当該地域まるごとミュージアムのバックボーンとなる対象地域の総合学としての「武相学」を確立・深化させるため、研究者や地域住民、学生などが参加する「武相学研究会」を立ち上げ継続的な研究活動を展開した。具体的には地域研究者に講師になってもらい八王子学園都市大学 ( いちょう塾 ) の公開講座を、以下の通り法政大学多摩共生社会研究所と共催で年 4 回多摩キャンパスで開催した。参加者は延べ 208 名。

**①第 1 回研究会**

・開催日 : 2015 年 5 月 16 日 ( 土 ) 14 時 00 分〜 15 時 30 分
・テーマ :「武相学」での学びと地域まるごとミュージアム構想
・講師 : 馬場憲一 ( 法政大学教授 )
・参加者数 :55 名

武相学研究会

**②第 2 回研究会**

・開催日 : 2015 年 7 月 11 日 ( 土 ) 14 時 00 分〜 15 時 30 分
・テーマ : 武相の江戸時代 - 津久井と多摩の交流史 -
・講師 : 山口清　( 城山地域史研究会　代表 )
・コーディネーター　馬場憲一 ( 法政大学教授 )
・参加者数 :52 名

**③第 3 回研究会**

・開催日 : 2015 年 10 月 3 日 ( 土 ) 14 時 00 分〜 15 時 30 分
・テーマ : 武相の近代 - 多摩・津久井の交流史 -
・講師 :　沼　謙吉　( 八王子市史編さん審議会委員 )
・コーディネーター　馬場憲一 ( 法政大学教授 )
・参加者数 :　53 名

**④第 4 回研究会**

・開催日 : 2015 年 11 月 21 日 ( 土 ) 14 時 00 分〜 15 時 30 分
・テーマ : 武相における剣術の実態 - 幕末期諸流派の動向―
・講師 :　小島政孝　小島資料館館長
・コーディネーター　馬場憲一 ( 法政大学教授 )
・参加者数 :　48 名

**(2) ワークショップ形式のモデル事業の展開**

※この部分は馬場ゼミ学生プロジェクトとして実施のため「学生プロジェクト活動報告書」に詳報あり、参照願いたい。

「武相地域まるごとミュージアム」設置に向けた当面の活動としてワークショップ形式のモデル事業を研究者、地域住民、学生と協働で取り組むこととし、今年度の場合は具体的には地域交流センターの学生プロジェクト事業「市民とともに武相地域の歴史と文化遺産を学ぼうプロジェクト」として以下のモデル事業を実施した。参加者は延べ 47 名。

**①史跡「絹の道」見学ツアー**

開催日：2015 年 11 月 22 日 ( 日 )　13 時～ 17 時

内　容：現地 ( 八王子市鑓水 ) までマイクロバスで送迎し、八王子市の市民ガイドボランティアや学生などが、絹の道 ( 浜街道 )、絹の道資料館、鑓水商人ゆかりの遺跡などを解説し、現地では参加した市民や地域住民、法政大学の学生たちと今回の企画事業や現地で学習したことなどについて意見交換し交流を深め、武相地域まるごとミュージアムへの理解を促した。

参加人数：市民、研究者、学生など 22 名が参加。

道了堂跡の見学風景

参加者との意見交換会 ( 絹の道資料館 )

**②「武相の戦争遺産」の保存と継承を考える学生・市民交流シンポジウム**

開催日：2015 年 11 月 29 日 ( 日 )13 時 30 分～ 16 時

内　容：武相地域にはかつてこの地域が軍都であったこともあり、「浅川地下壕」( 八王子市 ) や多摩送信所跡 ( 町田市相原 )、陸軍通信学校 ( 相模原市 ) など、たくさんの戦争遺産が残っている。戦後 70 年を経てアジア太平洋戦争 ( 第二次世界大戦 ) の風化が叫ばれる今日、それらの保存と継承が大きな課題となっている。講演や参加者とのワークショップを通してそれら課題を学生と市民とが意見交換し交流を図りながら地域の歴史学習を深め、武相地域まるごとミュージアムへの理解を促した。

参加人数：市民、研究者、学生など 25 名が参加。

学生による戦争遺産の報告

戦跡と平和を考えるワークショップ



# 4. プロジェクト終了と謝辞

本プロジェクトは 2014 年 4 月多摩地域交流センター長からの依頼をうけ、多くの地域住民・研究者・行政関係者、教職員、学生などが参加して研究会を開催し、「『法政大学多摩キャンパス・地域まるごとミュージアム ( 仮称 ) 基本構想』とその設置の可能性について」と題した報告書を作成し、2015 年度からはその実現に向けて武相学研究会の開催やワークショップ形式のモデル事業を行ってきた。しかし、多摩地域交流センターの今後の活動のあり方を検討する中で本プロジェクトについてもその見直しが図られ、2015 年度末をもって終了することになった。

「法政大学多摩キャンパス・地域まるごとミュージアム ( 仮称 ) 基本構想」の実現に向けて多くの地域住民・研究者・行政関係者・教職員・学生などが参加して検討してきた本プロジェクトであったが、その実現を見ずに終了することになり、プロジェクトの責任者として本プロジェクトに参加していただいた多くの方々に深くお詫びを申し上げるとともに、これまで本プロジェクトにいただいたご支援とご協力に対し厚く謝意を表する次第である。

また、私は今後、一個人として本構想の実現に向けて地域に働きかけていきたいと思っているので、志ある方々のご支援とご協力を切に希望している。

以上

法政大学・多摩地域交流センター年報　2015

2016 年 3 月 31 日 発行

発 行 者　法政大学多摩地域交流センター
〒 194-0298
東京都町田市相原町 4342
TEL：042-783-3014
デザイン　株式会社トライアンド
〒 252-0131
神奈川県相模原市緑区西橋本
5-4-30 SIC-2 2504
info@triand.jp
印刷・製本　株式会社相模プリント
〒 252-0144
神奈川県相模原市緑区東橋本
1-14-17
TEL：042-772-1275